改訂 帝國讀本 卷十

375.9
H07
資料室

41720
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2057

資料室
375.9
Ha7

大正七年十二月十六日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂 帝國讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

廣島大學藏書
38323

改訂 帝國讀本 卷十目次

一 秋色を觀じて人事に及ぶ 其の一……一
二 秋色を觀じて人事に及ぶ 其の二……八
三 芳宜園大人の靈を祭る……一六
四 月夜の美感……二〇
五 百蟲譜……二五
六 新島守 其の一……二九
七 新島守 其の二……三五
八 和歌新調（韻文）……四三
九 古文學に見えた祖先の面影（口語文）……四五

一〇　御堂關白　其の一……五二
一一　御堂關白　其の二……五六
一二　我が國の繪畫……六〇
一三　詩人杜甫……六八
一四　自然と色彩　其の一（口語文）……七二
一五　自然と色彩　其の二（口語文）……八〇
一六　清文寸錦……八七
一七　曾我會稽山　其の一……九三
一八　曾我會稽山　其の二……九七
一九　萬葉時代の歌人……一〇四
二〇　小野の深雪……一一二
二一　趣味（口語文）……一一四
二二　萬里の長城（韻文）……一二一
二三　大禮勅語……一二五
二四　大禮壽詞……一二七

自讀文

一　文學藝術の三作用……一三一
二　東路の旅……一三七
三　與謝蕪村……一四一
四　俳句百吟（韻文）……一四五

卷十目次終

廣島大學圖書之印

改訂帝國讀本卷十

一　秋色を觀じて人事に及ぶ　其の一

三宅雪嶺

春花の爛漫たるは妍にして艶、秋葉の霜に飽きて丹化するも亦稍〻相似、其の優劣を談ずる、古より之あり。天智帝の春山萬花の艶と、秋山千葉の彩と、何れか優れると宣へるに、額田女王應へて、

ふゆごもり、はるさりくれば、なかざりし、とりもきなきぬ。
さかざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもとらず。
くさふかみ、たをりてもみず。あきやまの、このはをみては、

(一)天武天皇の妃。

もみぢをば、とりてぞしぬぶ。あをきをば、おきてぞなげく。

そこしおもしろし、あきやまわれは。

と霜葉の二月の花に優るを陳べにき。而も女王の擇びし所は他の必ずしも肯ぜざる所、人各判斷を異にし、決着に到らんこと難し。今は姑く言はじ。但し春を觀るに寒風樹を吹くの時、梅花先づ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、之に續きて桃、續きて櫻、海棠、然る後萬花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉の綠を添ふるあり、添へざるあるも、皆枝條に點綴し、瓣の軟風に吹かれて繽紛飄落するは、眞に優にして裏なるを示すもの。稱して美とせんか、春は即ち艶麗とすべし。

枝條に點綴

更に秋を觀るに、秋碧空に浮びて、宇宙朗曠、滿目唯濃黃と爲り、渥丹と化し、黃なるは黃金を敷き、丹なるは錦襴を張り、

宇宙朗曠

壑に懸り溪に亙りて、錦障を聯ぬるの狀を現す。色彩を以てすれば、遙に春花に優るとす。べく、而して丹朱爛然として野火の烘ゆるが如きは、寧ろ甚だしきに過ぎ、同じく稱して美とせんか、秋は即ち宏壯とすべし。

秋の景色は實に天高く、氣淸み、草木齊しく色を變じ、野に、山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。しかも其の極るの時は正にこれ樹葉飄零して、寂寥の觀を呈するの時、歐陽修(一)が秋聲賦に、「初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其觸於物也鏦鏦錚錚。金鐵皆鳴。又如赴敵之兵銜枚疾走。不聞號令。但聞人馬行聲。」と。其の秋聲とは即ち凋槁せる樹葉の、互に接觸し、若しくは飄零して窓を撲ち、地に墜つるを指せるもの。其の一望丹黃華麗を盡せる所は、かくして搖落し、慘澹慄烈た

(一)宋の人。字は永叔。唐宋八大家の一。

慘澹慄烈

らんとす。

古來人の春花を引きて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて、而して散去る。いはゆる魁けてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の丹化し、

繡を纂め錦を綴る

繡を纂め、錦を綴り、璀璨として目を眩し、然る後飄零して擧げて一空に歸するも、亦頗る見るべからずとせず。之を人事に喩ふる、少壯事を起し、險を冒し、一敗して命を殞す、悲慘悽愴、人をして哀を催さしむるも、年既に老い、經歷あり、功勞ある身にして、尙發憤事を擧げ、運命に安んじて、從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深きことあり。敦盛の一ノ谷に陣歿せる、今に及びて尙人の說くところ、須磨の邊に種々の遺物あり或は敦盛蕎麥などいふもあり。遺物の僞造なるは言ふまでも無けれど、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能く之が右に出づるあらず。而もこれ唯事情の哀なるが爲にして、宛も春花の早く香を放ち、軟風に飄落すると同じ。齋藤實盛齡七十、鬢髮を黑くして戰場に臨み、軍利あらずして、餘衆皆退散せるに、乃ち單身留り戰ひ、「我が頭を斬り、木曾公に獻ぜよ。」と呼ばはりて死したる如き、はた又三浦義明の九十に垂んとして、賴朝の擧兵を援け、戰敗れて賴朝の死を聞き、其の子に語りて曰ふ、「公は一敗を以て死する者ならず、汝等必ず索めて隨へ。我は年老いて行く能はず、留りて此處に死せん。」と、遂に命を敵刄に殞しゝが如き、一種限りなき悽愴の感を人に與ふ。年老いて其の終を潔くするは、普通の事情の哀を催さしむると違ひ、秋葉の爛然として萬丈の錦を織り、而

搖落

して秋風に搖落するの形あり。

鳶鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人も亦老後に奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め、驕倨放肆、憚ることと無きや、誰とて之を憎く感ぜざるは無きも、其の病みて將に死せんとし、「吾死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふることと勿れ。唯願はくは賴朝の頭を斬りて墓前に懸けよ。」と言へる、幾分の同情を惹くに足るなり。賴朝は業遂げ、志成り、手に兵馬の權を握りて永久の基を立てしかど、臨終の際に特に見るべき無く、或は兇手に斃れたりとさへ傳へらる。彼資性善く忍び、喜怒色に現れず、深く謀り遠く慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超卓せしを見るに足るも、天眞を發露して、人心に愉快を感ぜしむ

驕倨放肆

器度

耳順鵬搏萬里

るに至りては、却つて之を清盛に看ること多し。秀吉既に天下を一統し、齡亦耳順に及び、乃ち鵬搏萬里、師を朝鮮に出し、進みて明に入らんとし、陣營に勞する約そ七年。前には必勝の算を立て一々皆中りしに、是に於て計る所、數〻齟齬し、竟に何の得る所なくして終りたるが、其の豪邁雄略、人心を發動するの大なるは、即ち茲に存す。これ亦終を壯にせるものと謂はざるべからず。家康は愼計密謀、いはゆる子規に對し鳴くまで待たんとせしもの。勝利を萬一に期し敢へて危道を踏むがごときことなく、隨ひて大慘事なく、大快事なきも、上杉氏東に起りて檄を傳ふる、直ちに赴きて之を伐ち、而して石田等以て計策の中れりとし、虛に乘じて大軍を西に集むるや、遽に軍を旋して關ケ原に會戰し、親ら馬を躍らして、諸

愼計密謀

軍を指揮したるは、戰略の見るに足る無きにせよ、意氣の頗る壯なるを見るべし。後十餘年を歴て、歳既に七十を超え、會〻大坂の役あり。前後二役共に大軍を督して之に臨み、終に覇業を定めたる、老いて益〻壯にして、徒らに安を貪らざるを知るべく、其の行爲の人に愉快を覺えしめざるに拘らず、猶當時に傑出したるの疑はれざる所以なり。

安を貪らず

二　秋色を觀じて人事に及ぶ　其の二

西郷隆盛功成り名遂げて故山に歸臥し、然る後壯丁を提げて三太郎を越え、九州を震動せしめしか、此の如きは理の見るべき無く、若し養成せし健兒の、既に事を發して復制する能はず、己獨り生く可からずとして之に一命を授けたり

(一)肥後北郡。肥後より薩摩に入る國道に當る三箇の峠、津奈木太郎、佐敷太郎、赤松太郎をいふ。

とする、餘りに力なきに過ぎたり。將力能く之を制するに堪へしも、實に自ら之を率ゐて政府を覆し、以て大いに志を逞しくせんとする、即ち餘りに無謀に過ぎたり。いづれより見るも稱するに足らずと雖も、而も老西郷の一生は即ち此の戰爭を以て、更に一段の生氣を添ふるあり。其の可愛の岳に籠守し、四面遁るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐて奮鬪圍を脱し、故山に還り、笑を含みて死したる、殆ど終を詩的にせるなり。何の爲に起りて、何の爲に戰ひたるか、意志判然たらざるも、其の判然たらざる所、却りて豪傑の豪傑たる所を表す。若し彼をして非命に死する無く、徐に天命を終へしめたらんには、位は元勳の首座を占め、聲望當代に並び無かりしならんも、其のいづれが生涯を豪壯ならしめたるかは言

(一)日向國臼杵郡。

策士

成敗利鈍

はずして知らる。

孔明年二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縱横、謀る所成り、成る所功ありしが、而もみな策士流の事、當時策に於て之に匹儔すべき者其の人に乏しからず。而して多く稱するに足らず。只夫れ窮時に方りて顧託を受け、遺孤を擁して艱險に當る。誠意忠節、少しも權を挾み、私を營むの跡なく、成敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出でては將、入りては相、病を力めて大事を處し、遂に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たる者の儀表と爲れる實に此に於てし、彼はこれを以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代と雖も、能く及ぶ鮮し。成吉斯汗(一)斡難河畔に起りて四方を經略し、雄師向ふ處朽ちたるを摧き、枯れたるを拉ぐが如く、西亞

(一) Onon. 外蒙古。黑龍江の上流。朽ちたるを摧き枯れたるを拉ぐ

(一) 甘肅省。
(二) 阿骨打(アクダ)の滿洲に立てたる王國。十世百二十年間。
(三) 陝西省、華陰縣の東。
(四) 今の河南省開封府。
(五) Chatham. 英國の政治家。少ピットの父なる老ピット。チャタム伯と稱す。

を蕩定して東歐を侵占す。然るも其の累りに領土を拓けるは、宛も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざるの觀あれど、還りて六盤山(一)に到り、病みて死せんとする、左右に語りて曰ふ、「金(二)の精兵潼關(三)に在り、南は連山に據り、北は大河を限る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに如くは莫し。宋と金とは世讐、必ず能く我に許さん。乃ち兵を唐鄧に下し、直ちに汴(四)京を撞け。汴急ならば必ず兵を潼關に徵さん。然して數萬の衆を以て千里赴き援はゞ、人馬疲弊し、到ると雖も戰ふ能はず。之を破らんこと必せり。」と。其の敵を料り、勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。

チャタム(五)は一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。而も其

の大なるの感ぜらるゝは此に在らず。既に官を罷めて後、英政府の米洲殖民地に苛政を施きて誅求到らざる無きを攻撃し、以て雙者の間を善くするに努め、而して一旦米の佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而して(一)リッチモンドが戰爭を不利として講和を主張せるに及び、翻然前説を棄て、病を扶けて議院に臨み絶叫すらく、「(二)ブルボンの前には決して膝を屈すべからず。飽くまで戰爭を繼續して、最後の勝を占めざるべからず。」と、氣昂り、胸塞がり、其の場に卒倒し、舁がれて家に歸り、終に瞑したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。(三)フィリップ・シドニーは(四)エリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に騁せにき。而も後人の感歎して措かざるは、特に其の臨終の光輝を放てるに於てす。英軍に將として和蘭を援

誅求

(一) Richmond.

(二) Bourbons. 當時の佛國王室。

(三) Philip Sidney. 英國の貴族。文武に通じ一代に才名あり。(西暦一五五七—一五八六)

(四) Elizabeth. 英國の女皇。(在位西暦一五五八—一六〇三)

け西班牙と戰ふや、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻りなり。從者百方搜索して僅かに一杯の水を得、捧げて其の前に到る。傍に一兵卒の傷つき倒るゝあり、氣息奄奄、從者の盃を捧ぐるを凝視して、心に大いに羨むものの如し。シドニー盃を口にせんとして、偶〻之を看、乃ちいふ、「彼の之を要する吾よりも多からん。」と。盃を垂死の傷兵に與へたり。これ後人の、今に及びて尙嘖々として稱する所若し彼が最期に於て此の事無かりしならんには、シドニーの名は、或は遺れられたるやも知るべからず。而も年壯なるシドニーの光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる春花の風に散ると狀を一にし、麗は則ちこれ有るも、未だ壯とすべきに至らず。之に反し、前に列記せる數者の齡傾きて尙志せる所に淬勵奔勞し、斃

氣息奄々

れて而して後に已みしは、以て麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。

人の世に處する、事を遂げ、功を奏せる者何ぞ限らん。身を顯榮の地に陞し、者亦甚だ多し。然るもしかして後十年、二十年、若しくは三十年の餘命を保ちながら、却つて一事の成る無く、一功の擧る無く、唯碌々無爲、食ひて臥し、覺めて食ふこと犬豚と擇ぶ無く、爲に前年の功績を遺れられ、甚だしきは死生の分明ならざるあり。彰著の功を樹てゝ、幾何ならざるに世を捐つるか、然らずんば老に及びて、掉尾の飛躍を演ずるか、いづれか其の一に出づるに非ずば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春の景色となるか、秋の景色となるか。必ず花々しき最期を遂げ、以て一生

犬豚と擇ぶなし

掉尾の飛躍

を艷麗若しくは宏壯ならしむるを要すべし。但し秋に入りて草木多く色を變じ、光彩燦爛一時の壯觀を盡し、然る後飄零凋殘し去るとはいへ、是等多くの草木を外にして、更に松柏の凋むに後るゝあり。固より萬木悉く然りとし、一を以て總べてを律すべきにあらず。彼の松柏の屬、四時を貫きて綠を變へず、目を眩するの紅彩、人を悅ばすの麗色を缺き、一歲の間特に觀て賞美するの時なしと雖も、其の蒼幹數十丈、亭亭として空を凌ぎ、天に參り、枝條は四方に張りて蓋の如く、翁欝として烟霧を籠め、隆冬を經、霜雪を冒し、長へに靑を更めざる、實に變化の外に出づるものと謂ふべし。これあるか、これあるか。これ亦察せずんば有るべからず。

—想　痕—

(一)加藤千蔭。
うなねつき　て
このかみ
(二)賀茂眞淵。

三　芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君は吾に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべにまかるとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異なら

おとことえ

閑居燈
世の事はそむきはてたる慾のうちになど燈の花を見すらん　春海

しぞく

ありふる
まめごと
あだごと

ん。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては我をおとことえのつらにぞ教へ給ひける。

中ごろにして、君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞく給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、喜ばしき節も共に喜びて、世にありふる業の、まめごともあだごとも、かたみに隔なく心をかはせつること、今にはたとせ。其の初を繰返し數ふれば、あひ友たること

村田春海筆蹟

既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にか相見ん、いづれの時にかことはん。常無きは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てゝ古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機の文あるみやびごとを尊みいへれど、(一)くひぜを守り、(二)舟にきだつくる輩、かれに泥み、こゝにひかれて、尚怪しみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙に靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりにたるなり。

(一)「宋人有二耕レ田者一。田中有レ株。兎走觸レ株。折レ頸而死。因釋二其耒一而守レ株。冀二復得一レ兎。兎不レ可二復得一。而身爲二宋國笑一。」（韓非子）

(二)「楚有二涉レ江者一。其劒自二舟中一墜二于水一。遽刻二其舟一曰。是吾劒所二從墜一也。舟止。從二其所レ刻處一入レ水求レ之。舟已行矣。而劒不レ行。求レ劒若レ此。不二亦惑一乎。」（呂氏春秋）

面おこし
價なき寶

其の自ら詠みいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とり〴〵に備らざるはなし。其の古を寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さざることなく、目に觸るゝものは言葉にのせざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、其の名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今黃金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰かは慕

はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙に見そなはせとなん申す。

——琴後集——

四　月夜の美感

高山林次郎

月光の色相が吾人の心に惹起す感情は、其の内容に於てこそ沈欝悲哀なれ、其の形式に於ては不定にして、そが沈欝悲哀の對境に就いては、何等明確なる意識あるなし、只何となく思ひ沈み、只何となくうら悲しきのみ。譬へば野も山も共に月の一色に塗抹せらるゝが如く、我が心にも亦一種悲哀の調子の響き渡るを覺ゆるなり。もし人の心に快濶と沈欝との両面ありとせば、沈欝の一面は此の悲哀の響に共鳴

共鳴

して、やさしき、悲しき、あはれ深き、其の他これに類せるもろもろの情緒に開發の機會を與ふ。(一)「月見ればちぢに物こそ悲しけれ。」とは這般の心情を歌ひたるものなるべし。されどかくして起されたる感情は、初のうちこそ定かならざれ、そが開發するに隨ひて、終には一箇の具象的形式を得ざれば已まざるべし。而して此の定かならざる感情に、具象的形式を與ふるものは即ち聯想なり。

(一)「月見ればちぢに物こそ悲しけれ、わが身ひとつの秋にはあらねど。」(古今集、大江千里)

具象的

聯想にも種類あり。觀る人の性格、閲歴、境遇によりて、もとより一樣ならざるべきも、何人の念頭にも先づ浮ぶべきは、自然と人生との對比なるべし。此の世にはあるまじき月の光のきよらかなる、蒼茫たる天空の、心ゆくばかり美しく且限りなき、山川の依稀として、無言の靜寂を保てる、平和のお

心ゆくばかり

依稀

もかげ、悠久のしるし、何れか現世の好對比にあらざるべき。始なく終なき自然の美しき大觀に面すれば、人生の事業の如何にあはれに、又みすぼらしく見ゆべきぞ。名利、得失、成敗、生死、あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短生命をあげて、此の煙火の巷に齷齪し悲喜することの、むしろ滑稽にも見ゆべきなり。かくの如きは月夜の感慨中、最も普通に見るところにして、又吾人の道德的感情の上にも最大なる影響を及すものなり。

自然と人生との對比について、最も著しき聯想は、過去の追想、もしくは遠人の思慕なるべし。

江畔何人初見月。　江月何年初照人。
人生代代無窮已。　江月年年望相似。

(一)唐の張若虛の春江花月夜と題する長篇中の句。

こは何人も知れる張若虛が詩中の句にあらずや。天地の悠久に比して、人生の須臾なるを歎ぜるが中に、過去世の追憶を交へて、感慨のうたゝ永きを覺ゆ。殊に李太白が有名なる把酒問月の詩の如きは、最も痛切に此の感慨を現せりと謂ふべし。

青天有月來幾時。　我今停杯一問之。
人攀明月不可得。　月行却與人相隨。（中略）
今人不見古時月。　今月曾經照古人。
古人今人若流水。　共看明月皆如此。
唯願當歌對酒時。　月光長照金樽裏。

我が眺むる月は、昔の人にも眺められたる月なりとの意識は、啻に過去世の觀念を實にして、同情の强さを增す力ある

のみならず、月其のものに對しても、一種の親しき他ならぬ感情を覺ゆべし。されば月を介して、吾は直ちに古人の心情を感得する想あるなり。國破れて山河ありといふとも、しかも天上の明月の長へに渝らざるに較べなば、山河も尙桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、しかも自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追憶に際して、最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべく、月によりて遠人を懷慕する情も、同一の起原を有すべし。

過去世の追憶、遠人の思慕、これ等は月夜の聯想として、恐らくは何人もおぼえあることならん。此の聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふる力あり。諸の詠歎は此の聯想の絲をたどりて一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふべし。

後景

五　百蟲譜

横井也有

―樗牛全集―

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛びて翁の目覺したれば、此の者の事、更にも謗り難し。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず、此のものばかり初蟬といはるること大いなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えず。」と此のものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛び

(一)古今集序「花になく鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々。」

(二)「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。」（芭蕉）

五月の闇

蜀魂

かひ、草にすだく。五月の闇は唯此の者の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代りにせられたるは、此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは殊の外の不自由なり。俳諧には其の眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくく〳〵ぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、此のものになりたり。」と、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲にさけぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は誰がために身をこがすにか。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。

(一)淳于棼、家ニ居廣陵ニ、宅南有ニ古槐樹一。棼醉ヒ臥ニ其下一夢入ニ大槐安國一見レ王。王曰。吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者送出レ穴。遂寤。尋ニ古槐下蟻穴一。乃槐安國。又一穴直上ニ南枝一。即南柯郡也。

(二)宋の文人歐陽修に憎蠅辭あり。

(三)江戸初世の歌人木下長嘯子に紙魚を哀む詞あり。

雲水

いかつし

同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて其の身の安き事を得ん。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

蝸牛は只水にあるべき者の、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちたれども、行く先々を負ひあるくは、雲水の安きにも似ず。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より其の心いかつし。人の上にも此のたぐひはあるべし。

蟹の歩にたとふべきものこそ無けれ。たゞ、原、吉原を、駕籠にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。

むくつけし

端居

促織、鈴蟲、轡蟲は、其の音の似たるをもて名によべり。松蟲の其の木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きり〳〵すのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲はわれからと、たゞ身のうへを歎くらんを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、いとやさしげなり。されど、父のみ戀ひて、などか母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらん、又は長月の頃、力なく殘りたる、さびしきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣燒く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇のひまなかりけん。

—鶉衣—

(一)支那晉の世の隱者。嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎を竹林七賢といふ。

(二)承久三年。

(三)順德天皇。

(四)仲恭天皇。

(五)土御門院。

(六)後鳥羽院。

(七)近衛基通の子。

(八)後京極良經の子。

(九)當時の將軍頼經。鎌倉に在り。

六　新島守　其の一

四月二十日帝(三)おりさせ給ひ、春宮(四)四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近ごろ皆此の御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定ありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄(五)の院をば中院と申し、父(六)みかどをば本院とぞきこえさする。此の程は家實(七)のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時、道家(八)のおとゞ攝政になり給ふ。かの(九)あづまの若君の御父なり。

(一)後鳥羽院。
(二)鎌倉幕府方。
かつ〴〵御勘事

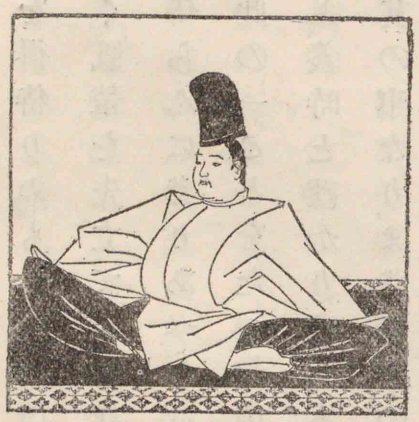
(三)北條義時。
(四)北條時房。
(五)義時の子。
たなびかせて

さても院(一)のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやう〳〵漏聞えて、ひがし(二)ざまに其の心遣すべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふ者あり。かつ〴〵かれを御勘事のよし仰せらるれば、身方に參りつるつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじう慌てさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆともみづからしたまふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房(四)と泰時(五)といふ一男と、二人を頭として雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。泰時を前に据

うしろめたき心

ゑていふやう、おのれを此のたび都にまゐらするは思ふところ多し。本意のごとく清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせんことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たび此の足柄箱根は越ゆべし。」など、泣く〳〵いひきかす。まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとあはれに心ぼそげなり。


後鳥羽天皇

かたみ

かくてうち出でぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時ただひとり鞭をあげて馳來たり。父胸うち騷ぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたの掟などは、仰の如く其の心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるにかたじけなく鳳輦を先立てゝ、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに參りあへらば、其の時の進退いかゞ侍るべからん。此の一ことをたづね申さんとて、ひとり馳歸り侍りき。」といふ。義時とばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。其の事なり。まさに君の御輿に向ひて、弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は冑を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命を捨てゝ、千人が一人になるまでも戰ふべし。」といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

とばかり

かしこまりを申す

都にもおぼしまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經(一)の大將ひとりのみなん、御(二)うまごのこともさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり、其の母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院(四)の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院(五)の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ〳〵數多きこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、此のほかの上達部

(一)藤原氏、西園寺家の祖。
(二)將軍頼經のこと。頼經は公經の女の出なり。
(三)頼朝をいふ。
(四)藤原殖子。後鳥羽院の御母。
(五)藤原重子。順德院の御母。

上達部

殿上人すべる

にも殿上人にも數多ありき。

○中院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物し給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづいくさの事なども捉ておほせられけり。

龍馬

いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打ちわたしがたければ、攻上る武者どももあやしくなやめり。かゝれども遂に都に近づくよしきこゆれば、君の御武者も出でたつ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞき罵るさま、言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山ににげ籠り、遠き世界に落下り、すべてやすげなくさわぎ滿ちたり。

いかゞあらんと君も御心亂れて、おぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわただしく色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月二十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に身方のいくさやぶれぬ。あら磯にたか潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なく呆れて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。

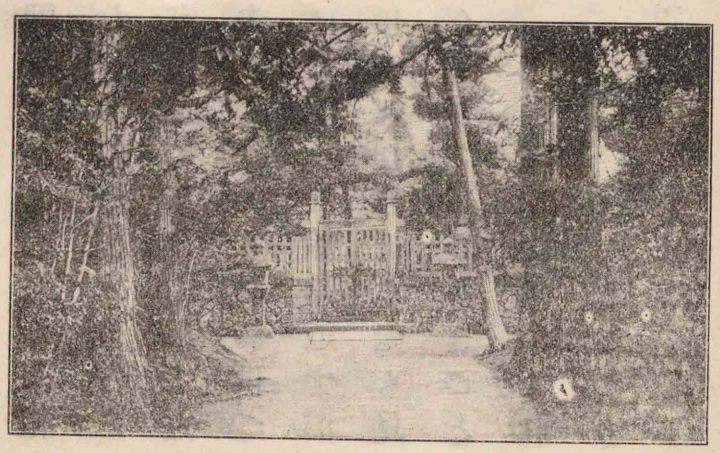
七　新島守　其の二

あづまよりいひおこする儘に、かの二人の大將軍謀らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱

岐國におはしますべければ、先づ鳥羽(一)殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日いらせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましう哀なり。「(二)ものにもがなや。」と思さるゝもかひなし。其の日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しかるべき御程なり。信實(三)朝臣召して御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じ十三日に御舟に奉りて、遙なる波路を凌ぎおはします御心地、此の世の同じ御身とも思されず。いみじういかなりける代々の報にかとうらめし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもおろし奉りき。此の卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へる例も、これや始なるらん。唐土にぞ四十五日とかや位

(一)山城國紀伊郡鳥羽にありし離宮。
網代車　今日を限りの御ありき
(二)「とりかへすものにもがなや世の中を、ありしながらのわが身と思はん。」（源氏物語河海抄）
御ぐしおろす
(三)藤原信實。畫家として著る。文永二年（一九二五）歿。年七十。

におはする例ありける。」とぞ、唐の文讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより下、はた殘るなく此の事に觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當る樣いみじげなり。



佐渡國眞野陵（順德天皇陵）

中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事、いと恐ありとおぼされて、御心もて其の年閏十月十日、土佐國の幡多(一)といふ處に渡らせ給ひぬ。

御心もて
(一)土佐國の西南幡多郡。

(一)後嵯峨天皇。
(二)土御門天皇の御母在子。せうと
(三)源通子。
北面の下臈召次
わりなきこと

去年のきさらぎばかりにや、若宮いでき給へり。(一)承明門院の(二)御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人の(三)むすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に止め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風ふきあれ、ふゞきして、來し方行く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

憂世にはかゝれとてこそ生れけめ
ことわり知らぬ我がなみだかな

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

うたて
よせ
きざみ
むげ
(一)平將門。
(二)藤原純友。
(三)源義親。
(四)後白河法皇。
御裳濯川の流

さても此の度世の有樣、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは「父の王を失ふ例だに一萬八千人までありけり。」とこそ佛も說き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなすこと數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。もしはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔りて、其の恨の末などより事起るなりけり。今の樣にむげの民と爭ひて君の滅び給へる例、此の國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門(一)、天慶の純友(二)、康和の義親(三)、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇德院の世を亂り給ひしだに、故(四)院の御位にて打勝ち給ひしかば、「天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の

(一)藤原信頼。
おほけなく
(二)二條天皇。

あやなき業

(三)後鳥羽院。

御門を守り給はすることは強きなめり。」とぞ古き人々も聞えし。又信頼(一)の衛門督おほけなく二條院(二)を脅し奉りしも、遂に空しき屍をぞ道の邊に棄てられける。かゝれば舊りにし事を思ふにも、猶さりともいかでか三皇、今上數多在しますに、かくいとあやなき業の出できぬるは、此の世一つの事に王城の徒らに亡ぶる樣やはあらんと、賴もしくこそ覺えしも非ざらめども、迷の愚なるまへには、猶いと怪しかりし。

四つにて位に即かせたまひて、十五年おはしましき。おりたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十八年がほど、此の國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へたまへりし其のほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御

(一)「津の國のこやとも人をいふべきに、蘆こそなけれ蘆の八重茸。」(後拾遺集、和泉式部)

藐姑射の山
霞の洞

さすらふ
こと問ふ

有樣にて、遠きを憐み近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津(一)の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波のあしの亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやう〳〵枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御住居幾春を經ても、空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、己がちり〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、自らこと問ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかりなかめ過させ給ふ。御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいていつを果とか廻りあふべき限りだになく、雲の涙、

煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御樣ども、口惜しといふも愚なり。

此のおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海面よりは少しひき入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱、葦ふける廊など、けしきばかり事そぎたり。誠に柴の庵の唯しばしとかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり。(二)水無瀨殿おぼし出づるも夢の樣になん。遙々と見やらるゝ海の眺望、(三)二千里の外も殘りなき心ちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹來るを聞し召して、

われこそは新島守よおきの海の
あらき浪かぜこゝろして吹け　―增鏡―

けしきばかり事そぎたり　柴の庵のしばし故づく

(一)いづくにもすまれずばただすまずあらん、柴の庵のしばしなる世に。(新古今集、西行法師)

(二)後鳥羽院の造り給ひし殿。攝津國三島郡島本村。

(三)和漢朗詠集白樂天の詩句。「三五夜中新月色。二千里外故人心。」

八　和歌新調

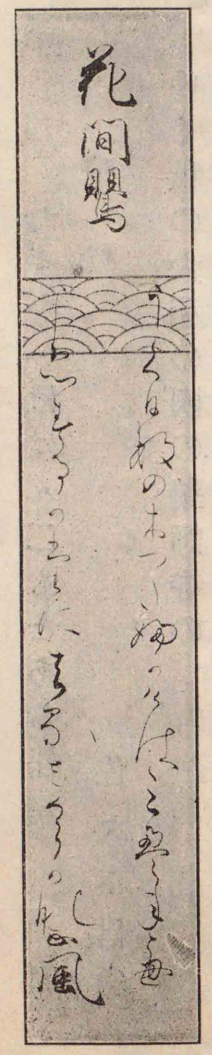
高崎正風

打笑みて膝にはひよるかなしさは
わが子人の子かはらざりけり

小出粲

くるゝまで柳にみえし春かぜは
梅のにほひになりにけるかな

井上通泰



高崎正風筆蹟

花間鶯　花の間ゝ鶯の木づたふかげは見えねども聲するかたにるさくらかな　正風

杉垣のしたをくゞりてやり水の
うき世にいづる聲きこゆなり　落合直文

一つもて君をいははん一つもて
おやをいははん二もとある松　佐々木信綱

ゆく秋の大和の國の藥師寺の
塔のうへなる一ひらのくも　尾上柴舟

冬の雨枯れし大木をしるゝ〳〵と
つたひて落つる寒き夕ぐれ

九　古文學に見えた祖先の面影

奈良朝以前の重なる文學は、古事記、日本紀の中に在る百八十餘首の歌と、延喜式の中に在る祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、其の中最も文學的價値のあるものは、大祓詞と祈年祭とであらう。祝詞を見ると我が國民が罪穢を忌み、清く直きを愛した事、神を敬ひ平和を愛した事が解る。

古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの　全けん人は
たゝみこも　平群の山の　隱白檮(くまがし)が葉を

うづに挿せ　其の子

これは尊が伊勢の能褒野で薨りたまふ時、遙に故郷の大和

を思ひやつて歌はれた思國歌である。歌の大意は「我は今病のために、旅の空に寂しく果てるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ故郷の命全く身の健かならん人よ、昔我が汝等と共に取つてかざして遊んだあの平群の山の隱白檮の葉を髮飾として、樂しく遊べよかし。我が愛しむ故郷人よ。」といふことであらう。

旅路に惱み、死に臨んで故郷を偲ぶのは、人情の自然で珍しくも無いが、毒氣に中り、恐ろしい苦悶を重ねて死ぬる間際に、「遙なる故郷人に語を寄す。命全けん人は、平群の隱白檮をかざし、陽氣に遊んで人生を樂しめかし。」といはれた御心持はどうであらう。此の樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象は、いかにも有難いものでは無いか。此の有難い氣象、日本民族の積極的光明性が、佛教などのお蔭で濕つぽく陰性化、消極化せられたかと思ふと、殘念でならぬ。

日本武尊はいろ〳〵な點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君を擒みひしいで、薦に包んで投棄てるといふ亂暴をされるが、それでゐて、君父の命には從ふといふ優しい所があつた。東西の兇賊を手も無く平げられる武勇があつて、それで姿はといふと、女裝すれば川上梟帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群がる夷の間に直往して火攻に逢ふ。劔で其の火を薙返して夷を鑒にする。熱田では、「熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心で

ありませうか。」と、叔母命に泣いて語られたが、やがて涙ををさめて夷を平げられる。死なうといふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勸められる。色々な積極的性質の面白く調和した趣、實に愉快な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら「吾が心常には空よりも翔り行かんと思ふ。」といはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。隱白檮に白鳥。私は此の二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、足許を固める着實性と、高きに憧るゝ向上心とを表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、而して之が日本武尊といふ上代の代表的英傑に繫がつてゐる事を面白く思ふ。日本の國民性が凝固つて、日本武尊となつたのでは無いかと思ふ。

次に奈良朝の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集とである。古事記は神代の大昔から推古天皇に至るまでの言傳を筆記したもの。萬葉集は奈良朝の歌人の作を中心とした上代の歌集である。而して二つ共に昔の日本民族の純なる面影を見るべき古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高天原に上られた時に、天照大御神が命を待ちつけて詰問せられる一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、我が那勢の命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんと欲すにこそと詔り給ひて、即ち御髮を解き御角髮に纏かして、左右の御角髮にも、御髮にも、左

右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏持たして、背には千入の靫を負ひ、比良には五百入の靫を附け、又いつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立てゝ、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく、何故上り來ませると問ひ給ひき。」

大意は、「須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大御神御領の高天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐ろしい權幕で上つて來たのは、きつと善意ではあるまい。察するに我が國を奪はんの下心であらうと仰せられて、早速凛々しき男裝に改めさせられ、髪を解いて角髪に結び、左右の御角髪にも、御髻にも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入の靫を前後につけ、左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振立てゝ、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹶散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、威丈高に立ちはだかつて、命の見ゆるを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。」といふことである。

土から掘出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大御神の氣高い、勇ましい御姿が、雄壯剛健な大文字の中に、躍動してゐるやうに思はれる。

我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづ此の樣なものであつた。

——五十嵐力、作文三十三講による——

一〇　御堂關白　其の一

一　剛氣

花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきみだれ雨のふる夜、帝さう〳〵しくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語などし給ひて、昔恐ろしかりける事ども など申させ給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる所などいかならん。さあらん所に一人いなんや。」と仰せられけるに、「え罷らじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなん。」と申したまひければ、さる所おはします帝に

さう〳〵しく

むづかしげ

けしき覺ゆ

(一)藤原道長。さる所おはします

て、「いと興あることなり。さらば行け。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」と仰せられければ、よその君達は便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせたまへる殿原は御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。此の陣の吉上まれ、瀧口まれ一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らん。」と申し給へば、「證なき事にこそ。」と仰せらるれば、「げに。」とて、御手箱におかせたまへる刀申して立ちたまひぬ。今二所もにがむ〳〵、おの〳〵おはしまし ぬ。

子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけん。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出

(一)藤原道隆。道長の長兄。
(二)藤原道兼。道長の仲兄。

便なき事

にがむにがむ

子四つ

(一)道隆。
(二)道兼。

でよ。」とそれを分たせたまへば、しかおはしましあへるに、中(一)關白殿、陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、其のものともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて歸りたまふ。栗(二)田殿は露臺の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見えたまひければ、ものも覺えで、「身の候はゞこそ、仰言も承らめ。」とて、各立歸り參りたまへれば、御扇をたゝきてわらはせたまふに、入道殿はいと久しう見えさせたまはぬを、いかゞとおぼしめすほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて、參らせたまへる。「いかに、いかに。」と問はせたまへば、いとのどやかに、御刀に削られたるものを取具して奉らせたまふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、たゞにて歸り參りて侍らんは、證

つとめて

さぶらふまじきによりて、高御座の南表の柱のもとを削り候なり。」とつれなく申したまふに、いとあさましうおぼしめさる。こと殿達の御氣色は今にも直らで、此の殿のかくて參りたまへるを、帝より始め感じのゝしられたまへど、羨しきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひたまひける。猶疑はしくおぼしめされければ、つとめて藏人して、「削りくづを遣はして見よ。」と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。其の削跡はいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は尙あさましきことにぞ申しゝかし。

—大　鏡—

一一　御堂關白　其の二

二　法成寺建立

今は御心地例ざまになり果てさせたまひぬれば、(一)御堂の事おぼし急がせたまふ。(二)攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、先づ此の御堂の事をさきにつかふまつるべき仰言のたまふ。(三)殿の御前も、此の度生きたるは別事ならず、此の願の叶ふべきなめりとのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。樣樣におぼしおきて急がせたまへば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊む べきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御

(一)法成寺。
(二)藤原頼通。
(三)道長。

堂々、方々樣々つくりつゞけ、御佛はなべての樣にやはおはします。丈六の金色の佛を、數もしらず作りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へつくらせたまひて、廊殿かず多く作らせなんど思し給ふに、鷄の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も怠らず、安きいも大殿ごもらず、唯此の御堂の事のみ、深く御心にしませたまへり。

安きいも大殿ごもらず

日々に多くの人々まゐりまかで立ちこむ。さるべき殿原をはじめ奉りて、宮々の御封、御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことにおぼしたり。國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今は此の御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らする事を、我も〳〵と競ひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこ

御封御莊
夫
地子官物

えさまさと

みて、品々方々、あたり〳〵につかうまつる。

或所を見れば、御佛つかふまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐて仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには大綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人手ごとに並居て磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども敷をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を、心に任せて切りとゝのふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝしりて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに、榑（くれ）、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりて上るめり。大津、梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來たれど沈まず。すべて色々樣々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各こと〴〵なり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせたまひて後は、いとゞ勝らせたまへりと見えさせたまふにも、猶なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙に拜み參らす。今は此の御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かりき。そなたざまに赴けば、海の涙もやはら

かにたちて、此の御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快くうかべても參ると見ゆ。なほなべて、此の世の事とは見えさせたまはず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寢たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申したまふ。弘法大師の、佛法興隆のために生れたまへるなり。」とぞ見えさせたまひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。」とこそは書きおかせたまふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。

——榮華物語——

一二　我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、此の両者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや。其の用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近、明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、獨り先づ進み、筆を揮ふもの感興に乘じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏すことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒。一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其の初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歷史が漸次に養成したる

理性は想像の銜

腦裏の印象

瀟洒輪奐

ものにして、今はた両洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だ之に伴なはず、平安朝に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず、佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺・法勝寺[一]の如き、今廢墟をだ

彫塑

形式美

形相

(一)承暦元年（一七三七）白河天皇創建。足利氏の末の世廢滅。

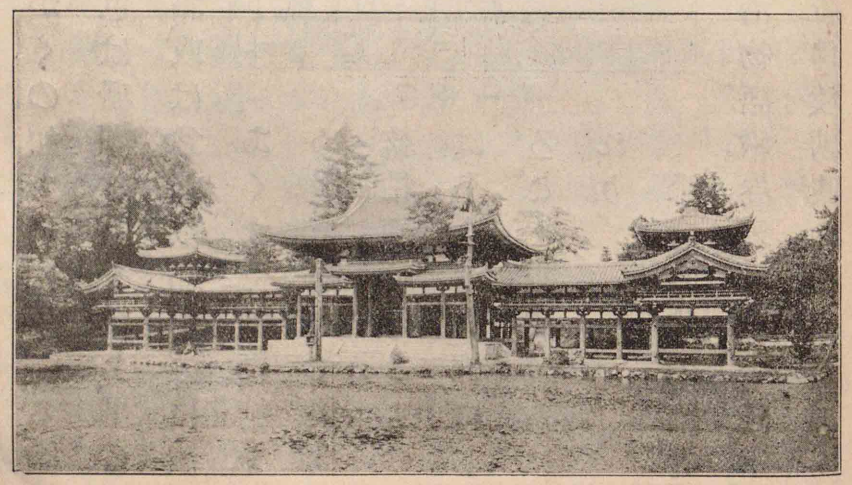
に存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しゝ狀態は、歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂[一]を見ても、其の一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に飜りて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たず

七寶莊嚴

(一)山城國宇治に在り。

轉讀

紫雲の來迎



平等院鳳凰堂

して、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は黃金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮に、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く選を殊にしたること、想見するに足れり。

雪舟畫像

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。(一)平治物語繪卷等は源平鬪爭の慘狀を寫し、(二)圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機運に從ふ。い

(一)現存三卷。住吉慶恩畫がき藤原家隆詞書といふ。
(二)四十八卷。古磵畫がき林觀雲竹書す。

づれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、內容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟(一)其の代表者たり。此の革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑〻平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくぐるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず、一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。敎外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てゝ筆に託し、巧を拋ち

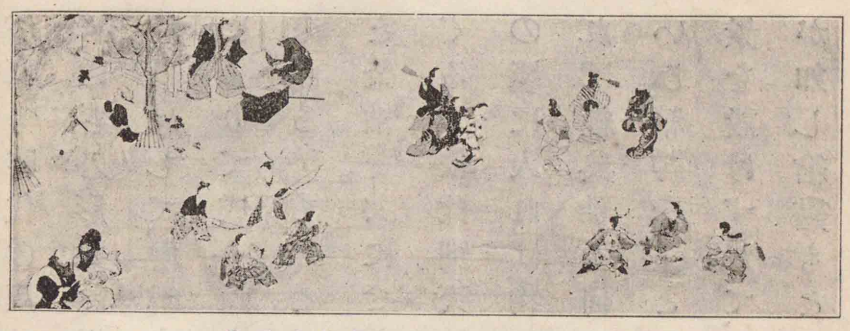
(一)畫僧。名は等楊。備中の人。渡宋し歸朝後周防山口の雲谷寺に住む。永正三年（一五〇六）歿。年八十二。

結跏趺坐
提撕
香茶の技
敎外別傳
以心傳心

蒼枯
恬澹
破墨一掃

流風餘韻

(一)狩野正信に起り元信の大成せる一派。
(二)土佐派の一派。鎌倉時代の住吉慶恩に起ると傳ふ。



英一蝶筆「十二ヶ月風俗繪卷」正月

て氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益〻味うて益〻趣あり。恍惚として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は更に其の規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野(一)、住(二)

先人の糟粕を嘗む

(一)尾形光琳。京都の人。享保元年(一三七六)歿。年五十四。
時世粧
(二)英一蝶。大阪の人。享保九年(一三八四)歿。年七十三。
(三)安房の人。號友竹。正德四年(一三七四)歿。年七十七。
(四)池野大雅。
匠氣
氣韻生動
第一義
(五)圓山應擧。丹波の人。寛政七年(一三四五)歿。年六十三。
(六)田中訥言。京都の人。文政六年(一三四八)歿。
(七)菊池容齋。名は武保。明治十一年歿。年九十一。

吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳(一)、滑稽の才ある一蝶(二)あり、菱川師宣(三)以來の浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅(四)等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とする所は即ち相似たり。應擧(五)等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脫の習を脫するを得ず。訥言(六)が創めたる土佐古風、容齋(七)が好める歷史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し此は彼の如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未

だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝるうちに明治の昭代は來れり。

——東圃遺稿——

一三　詩人杜甫

德富蘇峯

杜甫[一]は君國的詩人と稱すべきと同時に、又家庭的詩人なりといふを得可し。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、之に次いでは家族に關するもの多し。人未だ其の國を愛して、其の家を愛せざるものなく、未だ其の君に忠にして、其の家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮少せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的にあらずして、其の妻子弟妹を愛するの情を推及したるものなりき。支那の詩人、

(一)唐の詩人。字は子美、少陵と號す。太曆五年(一四三〇)歿。年五十九。

上は詩經より、下は明清の諸家に至るまで、其の家に多少の詩思を接觸せざるものあらず。されど支那の全史を通じて、未だ彼の如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。其の『進艇』の作を看よ。

南京久客耕二南畝一。北望傷レ神坐二北牕一。畫引二老妻一乘二小艇一。晴看二稚子浴一清江一。俱飛蛺蝶元相逐。並蒂芙蓉本自双。茗飲蔗漿攜レ所レ便。瓮罌無レ謝二玉爲一缸。

これ成都(一)に於ける浣花草堂生活中の消息なり。其の一家和樂の狀は千載の下尙活躍す。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蔕を並ぶ。先生貧なりと雖も、其の樂み決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。然も彼が如き清福を贏得たるもの、そ

(一)支那四川省の首府。

贏得

れ幾許かある。其の江村ト居の作中句あり、曰く、「老妻畫紙爲二
棊局一。稚子敲レ針作二釣鉤一。」と貧家の活計も、此に至りて寧ろ羨む
べきを見るなり。若し夫れ彼が『春望』の五律の如き、

國破山河在。城春草木深。感レ時花濺レ淚。恨レ別鳥驚レ心。烽火連二三
月一。家書抵二萬金一。白頭搔更短。渾欲レ不レ勝レ簪。

如何なる鐵石の心腸を有する者も、誦し來りて黯然たらざ
るものあらじ。詩としても絶調なり、情としても絶調なり。「家
書抵二萬金一。」の一句は、眞に彼の胸奥より湧出でたるなり。同時
に『遣興』の詩あり。

驥子好男兒。前年學レ語時。問知人客姓。誦得老夫詩。世亂憐渠
小一。家貧仰二母慈一。鹿門携不レ遂。雁足繫難レ期。天地軍麾滿。山河戰
角悲。倘歸免二相失一。見日敢辭レ遲。

彼の心は實に此の稚兒に惓々たりしなり。又『元日示二宗武一』の
作に曰く、

汝啼二吾手戰一。吾笑二汝身長一。處處逢二正月一。迢迢滯二遠方一。飄零還柏
酒。衰病只藜牀。訓諭青衿子。名慙白首郎。
賦レ詩猶落レ筆。獻レ壽更稱レ觴。不レ見二江東弟一。高歌淚數行。

杜甫畫像

前詩は至德二載の春、即ち彼が四十五歲の作、後詩は大曆三年の正月元日、即ち彼が五十七歲の作なり。僅かに父の詩を誦するを學ぶ驥子も、今は一個の青年と

なりぬ。吾人は之を讀んで、如何に彼が其の子に愛着したるかを知るなり。而して又其の同胞に眷々たるかを知るなり。

彼の愛は其の妻子のみならず、實に弟妹に及べり。彼の『同谷縣七歌』中の第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。「有弟有弟在遠方。三人各瘦何人强。」と。又曰く、「有妹有妹在鍾離。良人早沒諸孤癡。」と、其の他集中に散見する彼が同胞を懷ふの詩、枚擧に遑あらず。彼や眞に家庭的、若しくは家族的詩人たるに愧ぢざるなり。

——杜甫と彌耳敦——

一四　自然と色彩　其の一

松本亦太郎

太陽の光線が、直接或は間接に自然の事物に當り、それから反射した光線が、我々の眼底を刺激すると、其の時始めて

自然界の色彩が現れる。物理學者は色彩はエーテル[1]の波動であると說くが、波には長さの變化と幅の變化こそあれ、色彩の區別は無い。色彩はエーテルの波動に應ずる心の所產であつて、直ちに心の現象とはいはれないが、心を離れて色彩は現れるもので無いから、一方からいへば、自然界の色彩は我が心の反映したものと謂ふことも出來る。自然の色彩に樣々の表情の存するは、畢竟それが心の所產であるからである。

自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、之に對する心持の方から見ると、すべての色彩を先づ二つに大別することが出來る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩とであつて、畫家は之を溫暖色及び寒冷色と稱

(1) Ether.

表情

へて居る。

寒冷色の中心は青であつて、青に近似の色は、青綠から紺青に至るまで、皆凉しい心持を生ずる。溫暖色の中心は橙黃であつて、之に近似の色は、暗赤色から黃綠に至るまで、皆暖な心持を生ずる。

日本や伊太利あたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに何れの國民も、斯る青々とした空を戴いて居るといふ譯にゆかない。北歐諸國では晴れて居る時でも、空氣が透明で無く、空は灰色になつて居る。勿論多少の青みはあるが、冴え〴〵とした青色では無い。鉛の樣な色をしてゐる。隨つて晝でも、夜でも、天體の光が朦朧としてゐる。我々日本人は、伊太利の風色を餘り美しいとは思はないけれど

も、北歐の人が伊太利の自然を讃美して已まないのは、彼等が日常青天白日の美を見る事が稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透る爲である。遠山の青いのも、重疊した空氣を透して山を見るが爲である。青は浮動の心持を生ずるから、山も遠くなると輕妙に見える。大空の色は飽和の度の强い青では無い。濃い青を日光を以て薄くしたのである。あの淡青、即ち空色は靜な色であるが、喜悅の色である。最も濃い青は深い海の表面に於て之を見るを得る。それは即ち紺青である。

太平洋印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡り行くのであるが、極めて濃厚な紺青は其の深さ一萬七八千呎もある大洋の水面に於て發見することができる。紺青の水より雪

白の波の花の咲くのも不思議であるが、咲いた花が忽ちに紺青に染められて、雪白と紺青との爭は限りもなく繰返されて、両色彩の活躍する狀は、甚だ目覺しく、航海中の一つの慰みである。紺青は如何にも美しいけれど、沈鬱の趣があつて、一種の凄味がある。希臘の内海や伊太利の沿岸の水の如く、海が淺くなれば、紺青は稍淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化した如く爽快になり、更に瑞西の山間ルツェルン(一)の湖水となれば、藍青は綠を帶びて恰も翡翠の玉を水に化した如くになつて、色は靜だが、沈鬱の趣は薄くなる。萊因川の上流などになると、綠色は益、勝つて青色を壓するに至る。尤も河の水は礦物性或は植物性の溶解物があつて、種々に着色せられるが、概して水は深いから淺いに移るにつれて、紺青から

(一) Luzern.

主調

青を經て、綠に移るのである。人間は眼界が狹く、一局部のものしか見ない。而も其の局部には種々な色が現れて居るが、地球の表面の大部分を形成して居る水の色が青であり、而して又天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐると言はなければならぬ。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が斷えず行はれて居る。花の中にもあやめ、紫陽花、あめふり草、野生の朝顔など、何れも凉しく、靜に人の心を休息させる色である。

寒冷色の青と正反對なのは橙黃色である。これは暖い色であると共に、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は、最も光輝ある橙黃色である。秋の夕陽が西山に沒しようとする際の空の色は、太陽から出る黃金色の本性を最

もよく發揮する。例へば東海道で見る富士の背後に日の沒する際や、京都の愛宕山の後に日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山岳の碧色と相對比して、其の見榮が一層である。私の心に最も強い印象を殘したのは、紅海の上から眺めたシナイ山(一)の夕陽の景色であつた。シナイ山は絶頂から黃金の光を浴び、山の中腹に懸つた雲は、黃金の神火が燃える如くに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中にエホバ(二)の聲が聞えたとか、暗中火の柱が立つてイスラエル(三)の民の沙漠旅行を先導したとかいふやうな猶太の神話は、あゝいふ景色から湧出したのではあるまいかと思はれた。太陽の光線も、日本ではさまで强烈ではないが、希臘の雅典(四)附近の夏の太陽といつたら、朝から偉い光輝を放つて、其の光が大理

(一) Mt. Sinai. 紅海の北海岸シナイ半島に在り。
(二) Jehova.
(三) Israel.
(四) Athens.

石質の地面に反射する時は眼に痛を覺える。煤色の眼鏡を掛けずに、雅典附近を旅行するのは、眼の爲に危險であるといはれて居る位である。希臘神話で、太陽の光線をアポロの射出す矢であるとしたのも、成程と合點せられる。

太陽の光が月や星に反映する時は、餘程趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限りに於ては、熱烈な黃金色となるが、月に映じた時は柔く、幾分冷な色になる。地平を出る時の月は空氣の汚濁してゐるため、銅色を帶びて居るが、段々高くなつたのを、澄渡つた空氣に透して見ると、空氣の青色が加つて來る爲に月は黃金に銀を混じた如く、稍蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體天象の色としての黃金色は、其の發顯の規模が大きく、種々に人の

心を躍動せしめるのであるが、小規模に於ては、地上の花鳥の色となつて人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は何人が眺めても怡悅を感ずる。其の他連翹、山吹、月見草、黃菊、水仙の類、四季の花として、いづれも優しい懷かしい趣がある。南瓜、胡瓜の花は胡蝶の舞ふ姿と共に野趣があつて面白い。

一五　自然と色彩　其の二

紫紺と橙黃との中間に位して居るのが、綠色及び其の附近の色である。綠色は寒暄相和し、興奮沈靜相合し、所謂折衷的の性質を有する色である。地上に於ける非情の生物の有する特色であつて、天には無い色である。人間がいつまで眺めて居つても飽きない色は綠である。嫩草や、若葉は大抵帶綠黃色で始るが、日を經るに隨ひ綠色となり、終には暗綠色となる。佛蘭西あたりでは、夏の盛でも木の葉は帶黃綠色で、柔く生々しいが、日本や英國では木の葉は忽ち暗綠色となり、自然の景色が硬くなる。若葉の萠出るときは、誠に美しい。氣が舒び〳〵する。五月初の若葉の景色は、四月初の花の景色よりも、實は遙に趣が深い。東台(一)の新綠、京都東山の新綠、宇治の新綠、嵐峽(二)の新綠を訪うて樂しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を樂しむ心をもつて居らぬことを示して居る。眞に花の色を樂しむ人なら、新綠にも樹下に大騷をしてよい筈である。佛獨あたりでは花に對しては餘り騷がないが、森林の色を樂しむことは隨分盛である。巴里のボア・ド・ブーロン(一)の初夏の滴るごとき新綠が、都人士

(一)東京上野。
(二)嵐山。
(一)Bois de Bourogne.

の心を引附ける事は、實に大なるものである。(一)プィングステンは新綠の到來を祝する祭である。又英國や米國では、面積の廣大な芝生を造る事が實に巧で、其の國民が綠色趣味に富んで居る事をよく示して居る。日本の三都の中で、市街に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺の光景からいへば、東京は樹木の都と謂つてもよい。京都の周圍には美麗な山色はあるが、御苑を除いては、市中には樹木は乏しい。大阪は市の內外共に樹木は甚だ少い。工業の都會が自然と隔絕するは已むを得ないが、自然から餘り隔離すると、人の心は俗了する。大都會に樹林欝蒼たる大公園を現出せしめる事は、都人士の心身に極めて健全な感化を與へるものである。

暖い色と寒い色との中間に介在して居る點に於て、綠と

(一) Pfingsten. 聖靈降臨祭。(復活祭の後五十日)

關係が似て居るが、色の性質に於て之と正反對になつて居るのは紫の色である。紫は太陽の分光色中にはないが、自然の花の色としては可なり澤山にある。紫の中で、紺青に近いものと、赤に近いものとがある。牡丹、芍藥、躑躅などの花は赤に近い方で、杜若、菖蒲、菫、藤などの花は紺青に近い。木蓮の花はちやうど桔梗と赤との中間にある。人間に培養せられた朝顏の花は差別も甚だ多いが、大抵赤と青との中間に變化して、紫のものが最も多數を占める。總じて紫の花は人を興奮させると同時に、人を沈靜させる。派手なるが如く、おとなしきが如く、兩樣の趣が備つて居る爲、人を惱ます色である。薄紫になると、優美の情趣が加つて來る。紫色に光輝が加ると莊嚴な色になる。ゲーテは「神がすべての人に審判を下す

世界の末日の色は、必ず紫色であらう。」と言つたのは、其の莊嚴の趣から考へたものであらう。ヴィクトリヤ女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は、倫敦市中紫の幕で張詰められた。紫は王者の色と謂ふ事も出來る。

色の中で、人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。綠は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體内に流動する重な色である。然し赤は又天象の色として或は植物の色として、頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは、赤も隨分凄じいものになる。何人も知つて居るのは、夕燒の現象である。夕燒は空や雲が赤くなるのであるが、夕燒の内一種特別のものがある。私は曾て瑞西の山奥ミュルレン(二)といふ所に、夏旅行

〔Mürren.

をしたことがあつた。谷を隔てゝ、前面にはユングフラウ山(一)が永久の雪を被り、山腹の所々に氷河がある。日沒して四面暗くなる頃、時とすると、地平線下の太陽が此のユングフラウの雪を照すことがある。其の時は暗の空に眞紅の山嶽が現れ、實に莊嚴の趣がある。山が紅になると、對比の働によつて、背景の空が暗青色に見え、山の紅は益〻鮮になる。これはアルプ山の紅潮と唱へて、有名な現象であるが、天氣の工合が餘程よくないと、容易に見られない光景であつて、自然界に於ける赤色の發顯として、頗る大規模のものである。

通例地上に於て眺めることの出來る赤い風色は、秋の紅葉である。碓氷峠、日光山あたりの紅葉は、滿山燃えるが如くなつて美しい。京都附近の紅葉も、色が冴えて隨分美しいが

〔Jungfrau.

箱庭的の小風色が多い。私は或年の十月の初に、ロッキー山[一]の紅葉を見た事があつた。ロッキー山脈には、それこそ實に大きい山が突兀として天に聳え、雪を戴いて、氷河などが流れて居る。裾の山々溪々の木の葉は、眼の達する限り紅に染められ、汽車は幾ら走つても紅葉は容易に盡きなかつた。而して處々清流激湍があつて、實に美しかつた。

花として咲出づる紅は淡紅のものが多い。深紅は濃厚に過ぎて、之を廣い面積に擴げると、比較的味が乏しくなるが、淡紅となると、喜悅の情があつて、味が深くなる。櫻の花でも、桃の花でも、紫雲英の花でも、櫻草でも、民衆の狂喜するのは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とか、ダーリヤの花とかいふ樣なものは美しい。牡丹なども一

〔一〕Rocky mountains. 米國の東西に連亙する大山脈。

〔二〕Dahlia.

二輪深紅で咲いて居るのは見榮のするものである。

——渡り鳥日記——

一六　清文寸錦

清少納言

四季

春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころは更なり、闇もなほ螢とびちがひたる。雨など降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく

見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音などいとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白き、またさらでもいと寒き、火など急ぎおこして炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

ふるものは

雪。霰。霙はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

雲は

白き。紫。黑き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明けはなるるほどの黑き雲の、やうやう白くなりゆくもいとをかし。

月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒の覆盆子くひたる。

木の花は

梅は濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる、藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、郭公の蔭にかくるらんと思ふにいとをかし。祭の歸さに紫(一)野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、い

(一)山城國愛宕郡大德寺邊の舊名。

と白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣のうへに白き單かさねかづきたるやうにていとをかし。

四月の晦、五月の朔などの頃ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず、郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず。

つとめて

梨の花世にすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひいふも、げに其の色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなき物にて、文にも作るなるを、さりとも、あるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂こそ、心もとなくつきためれ。さては猶いみじうめでたきことは類あらじと覺えたり。

さりともあるやうあらん

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、樣うたてあれども、又他木どもとひとしう言ふべきにあらず。もろこしにことぐしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。ましてて琴に作りてさまぐなる音の出でくるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

うたて

ことぐし

木のさまぞにくげなれど、樗の花いとをかし。枯ればなに樣ことに咲きて、かならず五月五日に逢ふもをかし。

風は

嵐、木枯、三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いと哀なり。曉、格子、妻戸など押開けたるに、嵐のさと吹渡りて、顏にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月晦、十月朔の程の空打曇りたるに、風のいたう吹くに、黃なる木の葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いと哀なり。櫻の葉、椋の葉などこそおつれ。十月ばかりに木立多かる所の庭はいとめでたし。

野分の又の日こそいみじう哀に覺ゆれ。立蔀、透垣などの伏しなみたるに、前栽ども心苦しげなり。大きなる木ども倒れ、枝など吹折られたるだに惜しきに、萩、女郎花などの上に、よろぼひはひ伏せる、いと思はずなり。格子のつぼなどに、さと際を殊更にしたらんやうに、こまゝと吹入りたるこそ、荒かりつる風のしわざとも覺えね。―枕草紙による―

前栽

思はずなり

一七　曾我會稽山　其の一

近松門左衛門

富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騷もいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を古鄕へ歸し、出立つ祐成が裝束は、母上より賜はりし秋の野に草盡し縫ひたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黑鞘卷の太刀を佩き、竹の子笠の紐强く、上に下部の靑合羽、陣松明に道照させ、先に進めば五郎時致、これも母より賜はつたる白綾に鶴の丸縫ひたる袷衣、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰ざし、別當(一)より賜はつたる源氏重代友切丸、肩にうちかけ紙

(一)箱根權現の別當。時致幼時の恩人。

合羽、しめたる笠の怯れじと、跡に續いて出立つたり。

「いかに時致、母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不孝といひ世の人口、生きたるかひも有るまじきに、天の惠か降る雨に、御寮(一)の御立は延引す。狩場の用意も事靜まる。殊には蒲(二)の入道殿貸し給はつたる此の割符。頼朝公の膝元へ、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内。假屋には定めて遊女數多有るべきぞ。罪作りに手な負はせそ。雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいかばかり。悲しさよ。」

「仰にや及ぶべき。祐經は籠中の鳥、網代の魚、やはか洩し候べき。恐らくは此の時致、天魔波旬に出合ふとも、ちつとも

(一)源頼朝。
(二)源範頼。
籠中の鳥　網代の魚　やはか

怯まぬ魂。今宵の雨は身に掛り、ぞつこん徹つてわぢわぢと、物悲しう罷り成る。敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず。最後の盃一つ飲うで給はれ。」

と腰につけたる懸烏帽子に、降りくる雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、

「なう七度結んで兄となり、六度契りて弟となると傳へ聞く。死替り生替り、兄弟の縁は切るまじ。」

とさらりと飲してさしければ、時致とつて押戴き、

「兄は親にて候へば、母うへの御盃も之に籠り、天の甘露、仙家の漿、此の酒に勝らんや。」

と受けては飲み、受けては飲み、降りくる雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲むと、思ひ知らぬぞ哀なる。

五月雨の一頻りをだゆみて、空さりげなく晴々と、北斗の光鮮に晴渡れば、安西の彌七郎、新開の荒四郎、旅裝束に下部を引具し、「雨も霽れて候ぞ、君は明日五つの御發駕。先手は追付けお立の御用意。」と呼ばはらせ打つて通る。兄弟はつと顏見合せ、「此の騷に亂れ入り、討つて本望達せん。」と袖摺違へ駈通る。

「こりや〳〵、何奴なれば御假屋の傍近く、斷もなく忍び行く。馬盜人か盜賊か。それ搦めよ。」

とひしめけば、祐成騷がず、

「いや苦しからず、鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。咎め立してかたゞが、所領の仇ばしし給ふな。疑はしくば見られよ。」

と首に掛けたる通路の割符、「是見られよ。」と差出す。両人恟りばし

詞を變へ、「存ぜぬ事とて雜言申せし、御免あれ。新開、安西咎めたりとは、祐經殿へは必ず沙汰なしに賴み入る。假屋へは此の辻を左へきれ、行當りの大構。いざ御通り候へ。」とばか慇懃の空輕薄、結句敵の引入を、仕濟し顏にぞ別れける。

ばか慇懃の空輕薄結句

一八　曾我會稽山　其の二

兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此の割符、蒲殿の御恩ぞと、御寮の假屋の傍近く、忍び入るこそ危けれ。

右左の假屋騷ぎ立ち、「お先手は發足の御觸有り。合羽は取置き、腰錢を取落すな。馬よ鞍よ。」と犇けば、兄弟彌氣も急かれ、

「祐經が假屋とてもさぞ有らん。是まで忍びしかひもなく、此の雨の降止むこと、神明にも見放され、よく〳〵武運に

盡きしか。」

と拳を握り齒を鳴し、虛空を白眼んで立つたる所に、秩父の[1]執權本田の次郎近經、小具足に身をかため、本陣の夜廻してけるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩みくる。

兄弟「誰そ。」と咎むれば、波に搖らるゝ冲津船。知邊の磯は此方ぞ。」と囁く聲に、祐成はつと嬉しく、

「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此の度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されん。今宵年來の大望達せんと存ずる所、俄に雨霽れ、假屋々々は出足の用意。此の騷にはおぼつかなし。此の儘歸つていつの時をか期すべき。無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執りなし賴み入る。」

[1] 畠山重忠。

懇情

といひければ、兄弟が耳に口を寄せ、

「氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。それ故假屋も寢靜まる。こなたへ〳〵、靜に。」

と道の案內の杖柱、嬉しさ類はなかりけり。

「これこそ祐經が臥床なれ。心靜に本意を遂げ、會稽の耻を雪がれよ。」

會稽の耻

五百生

「御案內の程、五百生の體を燒くとも、いかでか報じ盡すべき。隨つて通路の此の割符、蒲の入道殿より、密に拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返辨申さんやうもなし。我々が死體にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に組し、反逆の族よと、死後の虛名に御骸を瀆さん事、御恩を却つて仇にて報ずる道理。近經殿に預け置く、然るべく賴み存

ずる。」

と二枚の小札を手に渡せば、

「尤も〳〵。近經に任されよ。主人重忠惡くは計らひ申されまじ。老母の事もゆめ〳〵麁略候まじ。今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顏。弓矢の禮儀是まで。」

と本田は假屋に入りにけり。

「今は何をか期すべき。」と兄弟合羽かなぐり捨て、本田が教へし敵の假屋は是なりと、木戸、駒寄を飛越え、跳越え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。

次に伏したる宿直の侍、足音に目を覺し、「すは盜人よ。」と呼ばはつて逃げいづる。假屋々々に聞きつけて、「そりや盜人よ、御立よ。」と騷の上にまた混亂。相圖響かす太鼓、鉦、かん〳〵どんどん、「どんくさい。又雨が延びて來た、お立が降る。」と入るも有り。雨の足音さつさつさ。人の足音どろ〳〵〳〵。右往左往にもてかへす。其の隙に兄弟は、敵工藤祐經を、思の儘に討果し、門外に走り出で、袂を絞つて喉を濕し、勢猛に立つたりし心の内こそ嬉しけれ。

「えゝ心地よい時致。年月の思にくらぶれば、敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ、心急いで忘れしが、祐經に止め刺しつるか。」

「あれ程に切る上は、なんの仔細か候べき。」

「いや然はなし。跡にて實檢有らん時、敵を討ちは討つたれども、止めを刺さぬはうろたへたりといはれなんは、骸の上の耻辱ぞかし。五郎如何に。」

嗔恚
不退の彼岸

と有りければ、「尤も。」と打頷き、誰をか恐れ忍ぶべき。のつさのつさ、假屋の歩み板、ぐわつたぐわつた踏鳴して引返し、障子、襖はら〳〵と蹴放し、祐經が死骸にどうと跨がり、

「よつく聞け祐經。一念の嗔恚に依つて敵と成り味方と成る。六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ。」

と腰の指添を抜き、

「そも此の刀は箱根にて初めて見參したる時、得させたる赤木の小刀。御邊元の主なれば、鐵の味は知りつらん。只今返す受取れ。」

と右手の耳の下よりも、ゆん手へ通れと刺す程に、耳と口とを一蓮託生。「南無阿彌陀佛。」と回向して、元の所へ立歸るに、手指す者さへなかりけり。

祐成待受け、

「落ちば此の儘落つべけれども、隱れ忍んで一生を暮さんは、生きたるかひは有るまじ。一足にても逃ぐるとは弓矢の耻辱。殊更に、我々故に御生害有る蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命。浪人の我々が錆太刀と、奉公日の出の殿ばらが、双を試して討死せん。」

「尤も。」

と二人等しく大音上げ、

「伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衛門祐經を討留めたり。頼朝公の御内に弓取は無きか。折合ひて打留めよ。」

と呼ばはつて、あたりを睨んで控へたり。

闇さは暗し、雨は降る。假屋々々に「すは夜討。」と弓一挺太刀一振に、五人三人取附いて、「我よ人よ。」と奪ひあひ、繋ぎ馬に鞭打つて、遲しとあせる所も有り。鎧に辷り兜に躓き、小手を臑當、草鞋を笠、上を下へと犇けば、御馬屋の德竹大聲上げ、

「物の黑白も見えざるに、松明出せ。」

と呼ばはれば、二千軒の假屋より、箙、靫、蓑、竹笠、傘、箒に至るまで、火を付けて投出す。裾野の暗は忽ちに、百千の朝日影、一度に照す如くなり。

—曾我會稽山—

一九　萬葉時代の歌人

新保磐次

柿本人麿は石見國に生れたりとも、また大和國に生れたりともいふ。持統の朝に草壁皇子の舍人となり、皇子薨去の後、朝廷の小官に任ぜられ、其の後高市皇子に仕へしが、皇子薨じ給ひし後、文武の朝に石見の國に赴任して、元明の和銅年中彼の國にて卒しぬといひ、或は此の朝の神龜又は天平年中に卒しぬともいふ。其の間紀伊、伊勢、吉野等の遊幸に供奉し、或は諸皇子に從ひて名勝を探り、或は近江、石見、筑紫の諸國に遊びて、過ぐる所歌あらざるはなし。

其の近江の舊都を傷む歌、

さゞ波の志賀の辛崎幸くあれど
大宮人の船待ちかねつ

又石見より妻に別れて上る時の歌、

石見のや高角山の木の間ゆも

吾が振る袖を妻見つらんか

死に臨みて自ら傷みて作れる歌、

鴨山の岩根し枕けるわれをかも
知らずと妻が待ちつゝあらん

皆哀情痛切にして、鬼神を泣かしむべし。

人麿殊に長歌に長じ、古今獨歩と稱せらる。然れども官位は甚だ卑くして、位は六位以下、官は石見掾若しくは目に過ぎざるべしといふ。古今集の序に正三位人麿とあるは、後世の贈位にやあらん。柿本集に『唐土にありて』と題せる歌あれど、彼が入唐亦其の詳なるを知り難し。要するに人麿は微賤の身を以て、詞藻を雲上に達したる者にして、後世壬生忠岑が長歌の中に、

あはれ古ありきてふ　人麿こそは嬉しけれ
身は下ながら言の葉を　天つ空まで聞えあげ

といへるこそ事實なるべけれ。

山部赤人の傳も詳に知り難し。神龜、天平の間、彼も亦屢〻車駕に供奉して紀伊、吉野等に至り、或は自ら東國に遊ぶ。其の富士の歌は百人一首によりて兒女子にも知らる。彼が富士の歌なほ數首あり。

富士の嶺に降り置く雪はみなづきの
もちに消ぬればその夜降りけり

和歌の浦の歌亦世に知らる。

和歌の浦に潮滿ちくれば潟を無み
あし邊をさして鶴鳴きわたる

(一)「田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、富士の高嶺に雪はふりける。」

神龜元年聖武天皇の行幸に供奉して此の詠あり、滿潮の時の鶴の恐慌を叙するや、巧を假らずして其の妙、神に入れり。

人麿は長歌に長じ、赤人は短歌に長ず。人麿は善く情を抒べ、赤人は善く景を叙す。紀貫之は二人を評して、「人麿は赤人が上に立たんこと難く、赤人は人麿が下に立たんこと難くなんありける。」といへり。賀茂眞淵が人麿を評したる大意に、「其の長歌の勢は風雲に乘じて長空を行く龍の如く、詞は大海に潮の湧くが如し。短歌の詞は勇將の弓弦を鳴すが如く、深き哀情は千早ぶる神をもなかしむべし。」といへり。又赤人を評して曰く、「長歌の詞は吉野川の清きが如く、心は富士の嶺の高きが如く、只それ美を盡せり。短歌は巧を爲さずして自然に妙なるは、本心の高尚なるが致す所か。譬へば檳榔毛の車にて大路を渡る貴人の、聲色を動かさざるが如し。」といへり。世に二人を並べ稱して山柿といふ。

聲色を動かさず

山柿に亞げる詩人を山上憶良とす。憶良は大寶年中遣唐少錄として入唐せし人なれば、其の漢學に秀でしこと知るべし。歌は山柿に遊覽の作多きに反し、是は多く題を人事に取り、君臣、父子、夫婦の情を詠じ、社會、人生の有樣を歌へり。嘗て宴席より歸る時、

憶良らは今は罷らん子泣くらん
その彼の母も吾を待つらんぞ

天平二年彼が筑前守たりし時にや、貧窮問答の歌を作りて、地方貧民の苦を訴へたり。其の中に、

天地は廣しといへど　吾が爲は狹くやなりぬる
日月は明しといへど　吾が爲は照りや給はぬ

＊　＊　＊　＊　＊

いとのきて短き物を　端切るといへるが如く
笞取る里長が聲は　閨戸まで來立ち呼ばひぬ
かくばかり術なきものか世の中の道

以て官吏誅求の狀を述べたり。嘗て病に臥したる時、

男子やも空しかるべき萬代に
語り繼ぐべき名は立たずして

感慨淋漓として懦夫を起たしむるに足れり。眞淵彼が歌を評して曰く、「言質朴にして心美し。久米部の武士の武裝して舞ふが如し。」と。

此の人々を初として、重に奈良朝の歌を集めたるは萬葉集なり。仁德天皇以後の歌を含むと雖も、上代の者は甚だ少し。撰者は橘諸兄にして、大伴家持が修補せしものなりといひ、異說猶多けれど、家持の手に成りしものの如し。家持は百(一)人一首の中納言家持にして、聖武天皇の天平二十一年、金銅の廬舍那佛造立に當りて、陸奥國より黃金を進獻せる時、

すめらぎの御代榮えんと東なる
みちのく山にこがね花さく

と詠ぜし人なり。萬葉集中二流を下らざる歌人にして、最も多く武士的の歌を詠ぜり。

總じて萬葉の長所は長歌に在り、後世よく之に及ぶものなし。

(一)百人一首に中納言家持。「かさゝぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける。」

二〇　小野の深雪

昔惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、其の宮へなんおはしましける。其の時、右馬頭なりける人を常に率ておはしましけり。狩は懇にもせで、大和歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の家、其の院の櫻ことにおもしろし。其の木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさして、皆歌詠みけり。かの右馬頭の詠める、

世の中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

又、人の歌、

(一)文德天皇の第一の皇子。小野宮と申す。
(二)在原業平。
(三)河內國北河內郡牧野村に在りき。

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ
うき世になにか久しかるべき

歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで物語して、さて主人の皇子入りて、大殿ごもりたまひなんとす。十日あまりの月もかくれなんとすれば、かの右馬頭、

あかなくにまだきも月のかくるゝか
山の端にげて入れずもあらなん

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、皇子思の外に御髮おろさせたまひて、小野といふ所にすみたまひけり。正月にをがみ奉らんとて詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣でて拜みたてまつるに、つれ〴〵といと物がなしうておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、い

(一)山城國愛宕郡。

にしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。さても侍ひてしがなと思へども、公事どもありければ得侍はで、夕暮にかへるとて、

公事

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
雪ふみわけて君を見んとは

とてなん、泣く〳〵來にける。

—伊勢物語による—

二一　趣味

坪内逍遙

「眞正にして廣大なるものを感知するのをテースト(一)といふ。其のいづこにて如何なる形に現れるかは問ふ所では無い。苟も美なるもの、秩序あるもの、善なるものを感知し、愛敬する心の作用を、テーストといふ。」これはカーライルの語である。テーストを場合次第で嗜好又は風尚と譯し、趣味とも譯し、鑑賞力、趣味性とも譯する。凡そ人が物のよしあしを判斷するのは、重に理智の作用のやうに見えるが、其の實は此の趣味性がさせるのである。

(一) Taste.

此の性に本づかぬ批判は、冷かで、形式的で、感化、活動の力に乏しい。道德上、文藝上の事も、煎じつめた末は、皆此の性に歸する。それ故趣味といふことは等閑にはならない。蓼喰ふ蟲もすきずき、好となつては、理窟はどうあらうともそれが欲しく、嫌と思つては、命も捨てかねぬが人情の常で、そこに人生の意氣地も籠れば、うき世の味も生じ、古今、東西、文華の異同も根ざしたのである。お前の趣味は卑しいと言はれたとて、面白いものはやはり面白く、旨くも無い物を重ねるの

はつらい。眞に是非に及ばぬとは此の事で、理窟でどうもかうも仕樣が無い。嗜好は論爭し難しといふは道理千萬。他人の上をどうともし難いばかりで無く、自分の趣味性さへ、年齡や境遇で變り、四季で變り、時刻で變るもので、始末にならぬ。酒前酒後、食前食後の舌の作用が同じで無い。氣分のよい時と惡い時とでは、物の味が違ふ嬉しい時にはまづい物も旨いが、腹の立つた瞬間には一切が氣にいらぬ。運動不足の神經過敏の贅澤な舌には、如何な割烹も有難く無い程故、折角の料理人の苦心も思ひやる事も出來ない。まして一國一社會となつては、趣味の變遷に著しい差別があつて、それに本づく利害も僅少で無い。順序をいへば、時勢が一代の風尙を定めるのではあるが、其の風尙が原因となつて、後の時代

移風易俗

烱眼

精神を涵養する例もあるから、國民全體の趣味の善惡は風俗の本源である。かの文藝を重んじて、移風易俗の要具とするのも、それらが趣味性涵養の最大機關であるからで、國民の善惡美醜の評價力、即ち理想建設の地盤は、偏に此の趣味性の高下に依つて定まる。神代から奈良時代までの事は姑く措き、平安朝から鎌倉、東山、桃山、元祿、享保、文化、文政と變遷して來た我が國民過去の趣味性を見れば、國家隆替の因果までが、其のうちに見える樣である。希臘、羅馬の古より、近くは伊太利、西班牙、支那、土耳其の趣味性を檢するも、若し見る人に活眼があつたら、又同じ樣な感が起るであらう。烱眼の人なら、過去ばかりで無く、現代の趣味風尙の趣く所を見て、將來までも見透し得る筈と思ふ。

舌に上戸口、下戸口の別がある通りに、趣味にも雅俗の別があり、濃淡の差がある。澁ずきあり、華美好あり、江戸前あり、上方好あり、日本流、ハイカラ式、近松ばり、芭蕉じたて、屋敷風、町方振がある。西洋にも伊太利、獨逸、英吉利、佛蘭西と國々で別があり、此のまた間を行くものもあつて、尙おほまかに分けて見れば、大小、强弱、淺深、單複、濃淡の別がある。我が國の如きは、其の大と、强と、深と、複と、濃とに關する限りは、今までの所西洋趣味に及ばぬ。これには人種性や、氣候や、風土や、飲食物等に本づく生理上の原因もあらうし、政治、宗教、道德、風俗の感化に原因する所も隨分あらう。日本在來の趣味の發現した迹を見るに、おしなべて淡々しく、こまかく、あかるい。それ故、或時はかはいらしく、或時は淋しい。併し何と無く淡いから、深く悲しく、大きに凄じく、怖ろしい樣なことは無い。桃山や、元祿や、享保は、或は華美雄大、或は豪奢淫靡だといふが、決して西洋の或趣味の如く大袈裟でも無ければ、毒々しくも無い。あちらへ行つたことが無いから、臆測に過ぎないし、又將來のことは分らぬが、在來の風景畫や、風景の寫眞を見、又は所謂ロマンチスト(一)等の書いた作や論に鑑みて、英語に謂ふピクチュアレスク(二)とか、ロマンチック・ビューチー(三)とかいふのは、我が風雅の極致に比べては、幾分かあくどいものである。西洋の風雅は、日本の趣味からいへば俗に近い。日本好の西洋人などの好に、折々そんな例がある。つまり、我に一長彼に一短で、互に融通すべきことが多い。

要するに、趣味は廣く善惡美醜を甄別し評價する根柢と

(一) Romanti ist.
(二) Picturesque.
(三) Romantic beauty.

なるものだから、今日の如き大變遷期に於ては、最も其の涵養に心掛けねばならぬ。政治上、社會上の改革、即ち物質的の維新は一通り濟んで、今は精神上の維新に向ひ、宗教、道德、文學、藝術、ひつくるめていふと、風俗上の動搖が始つたのであるから、こゝ一段の注意が大切である。世間の氣風の移らぬ限りは、保存を本性とする婦人の風俗さへ、追々新時代式に化し行くと同じ度合に、國民全體の趣味性が、新機運の影響を蒙りつゝあるので、江戸趣味はたとひ滅びてしまはないまでも、今や將に退却すべき運命となつて來たのである。元祿趣味が喚戻され、桃山趣味が迎へられるのは、例へば、開國に先だつて王政復古が唱へられたやうなもの、まことの趣味界の國體は、歐化主義で定まるのでも無く、國粹保存一本槍に定まるのでもあるまい。隨つて最も眞正で高大な趣味を感知する力を導き養ふことが、此の際最も大切である。

—文藝瑣談—

征驂
平蕪

二二　萬里長城

土井晚翠

生ける歷史か、數ふれば　齡は高し二千年、
影は萬里の空遠き　名も長城の壁の上。
落日低く、雲淡く、　關山看す〳〵暮れんとす。
征驂悵みとゞまりて、　俯仰の遊子身はひとり。
絕域花は希なながら、　平蕪の綠今深し。
春乾坤に回りては、　霞まぬ空も無かりけり。
天地の色は老いずして、　人間の世は移ろふを、

歌ふか、高く大空に、
嗚呼、跡ふりぬ。人去りぬ。
昔に返り何の地か、
殘壘破壁聲も無し。
春朦朧のたゞ中に、

＊　＊　＊

姿は見えぬ夕雲雀。
歲は流れぬ。千歲の
かれ秦皇の霸圖を見ん。
恨も暗し、夕まぐれ、
俯仰の遊子身はひとり。

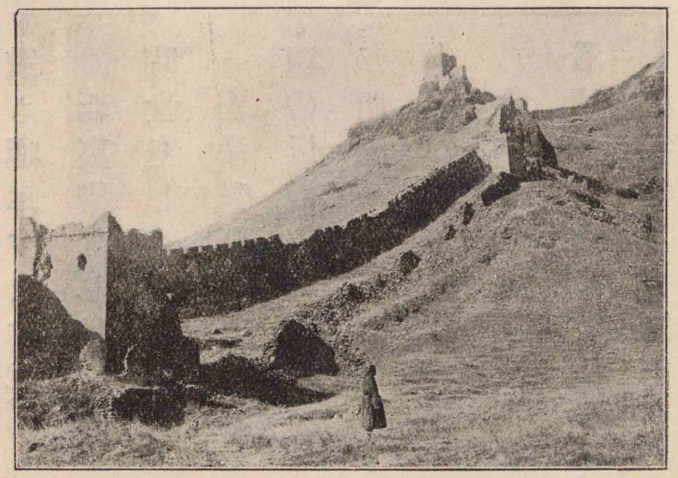
＊　＊　＊

邦は亡びて邦に次ぎ、
鼎は移る朝二十。
中華幾たび烽擧り、
又越え去りし國民の
山川影はかはらねど、

＊　＊　＊

人は代りて人を追ふ。
歲は流るゝ曆二千。
長城の壁越えきたり、
數さへいかに世々の跡。
春夢空しく跡も無し。

群雄の霸圖いたづらに、
殘すは獨り史上の名。
獨り邊土に影絶えず、
齡重ねて二千歲。
殘壘苔に今靑む
長城の影たふとしや。
民の膏血、世の笑、
虐政の形見それながら、
歷史の色に染められし
萬里の影ぞ懷かしき。
其の面影に忍びでて、
泣くは懷古の露のみか、
霞も咽ぶ夕まぐれ。



萬里の長城

暮春の恨誰がために、

霞も咽ぶ夕まぐれ、
北夷禦ぎし長城の、
時世空しく流れては、
秦、漢、魏、晉移り行く
西の嵐の吹寄する
西暦一千九百年、
中華の光、先王の
愛を四海に傳ふべき
看ずや豺狼の慾飽かで、
群羊守る力無く、
俯仰古今の物思、

遊子俯仰の物思、
昔の跡はかはらねど、
中華の姿あすいかに。
昔の跡に引換へて、
黄海の波今あらし。
東亞の嵐あすいかに。
道此の民を救ひ得じ、
神人の教いま空語。
基督教徒血を啜り、
異教の民の聲呑むを。
遊子の恨いつ盡きん。

征驂悵み嘶ける
思も遠く眺むれば、
自然の樂も絶果てつ。
恨を含む長城の

響をかへす壁のもと。
霞たゞよふ大空の
關山暮れて星出でて、
姿は闇に呑まれ行く。

——曉鐘——

二三　大禮勅語

列聖統ヲ紹ク
皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ、惟神ノ寶祚ヲ踐ミ、爰ニ即位ノ禮ヲ行ヒ、普ク爾臣民ニ誥ク。

朕惟フニ、皇祖皇宗國ヲ肇メ、基ヲ建テ、列聖統ヲ紹キ、裕ヲ垂レ、天壤無窮ノ神勅ニ依リテ、萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ、神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ、皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス。爾臣民世世

相繼キ忠實公ニ奉ス。義ハ則チ君臣ニシテ、情ハ猶ホ父子ノコトク、以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ。

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ、開國ノ宏謨ヲ定メ、祖訓ヲ紹述シテ不磨ノ大典ヲ布キ、皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ。聖德四表ニ光被シ、仁澤遐陬ニ霑洽ス。

皇考

光被

仁澤遐陬ニ霑洽ス

朕今丕績ヲ纘キ、遺範ニ遵ヒ、內ハ邦基ヲ固クシテ永ク磐石ノ安ヲ圖リ、外ハ國交ヲ敦クシテ共ニ和平ノ慶ニ賴ラムトス。朕カ祖宗ニ負フ所極メテ重シ。祖宗ノ神靈照鑑上ニ在リ。朕夙夜兢業天職ヲ全クセムコトヲ期ス。朕ハ爾臣民ノ、忠誠其ノ分ヲ守リ、勵精其ノ業ニ從ヒ、以テ皇運ヲ扶翼スルコトヲ知ル。庶幾クハ心ヲ同クシ、力ヲ戮セ、倍〻國光ヲ顯揚セムコトヲ。爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ。

丕績ヲ纘ク

照鑑上ニ在リ

二四　大禮壽詞

臣重信謹ミテ言ス。伏シテ以ミルニ、

陛下萬世一系ノ寶祚ヲ踐ミ、乾綱ヲ攬リテ坤維ヲ總ヘ、爰ニ天津高御座ニ昇御シ、即位ノ大禮ヲ行ヒ給フ。遠邇瞻仰シ、億兆抃舞ス。臣重信誠懽誠喜頓首頓首。伏シテ惟ミルニ、

皇祖天壤無窮ノ神勅ヲ　皇孫ニ錫ヒテ、八洲ニ君臨セシメ、三種ノ　神器ヲ親授シテ、五部ノ神ヲ臣事セシメ給フ。萬世不易ノ　皇基確然トシテ爰ニ定マル。

乾綱坤維

皇宗英武聖明

皇祖授國ノ　宸意ヲ體シ、天業ヲ恢弘セムトシ、皇師ヲ帥キテ中州ヲ平定シ、皇位ニ即キテ萬機ヲ親裁シ、大ニ經綸ヲ

洪範
皇謨
黎元
丕基

行ヒ、洪範ヲ　後聖ニ貽シ給フ。而シテ　皇孫ニ奉事セシ諸部ノ子孫、亦咸先志ヲ繼キテ皇謨ヲ翼賛ス。億載一統ノ皇業蔚爾トシテ維レ崇シ。

先帝登極ノ初、復古ノ廟策ヲ定メテ維新ノ皇圖ヲ啓キ、開國ノ鴻猷ヲ宣ヘテ萬邦ノ善長ヲ採リ、藩封ノ舊制ヲ廢シテ一途ノ治化ヲ施シ、不磨ノ大典ヲ布キテ立憲ノ政揆ヲ明ニシ、兵制ヲ建定シテ陸海ノ戎備ヲ嚴整シ、文教ヲ闡敷シテ黎元ノ智德ヲ啓養シ、産業ヲ殖興シテ厚生ノ道ヲ擴メ、制度ヲ釐革シテ庶政ノ規ヲ宏ニシ給フ。是ニ於テ乎國家ノ綱紀廓如トシテ光張シ、邦運ノ旺盛駸駸トシテ止マス。

陛下　大統ヲ承ケ、懿績ヲ纘キ給ヒ、
皇祖　皇宗暨　列聖ノ宏謨ニ遵ヒ、丕基ヲ鞏固ニシ、德光ヲ

宵衣旰食

宣揚シテ天職ヲ全クセムトシ、宵衣旰食　聖衷ヲ勞シ給フ。今大禮ノ吉辰ニ方リ、明詔ヲ下シテ肇國ノ大本ヲ申明シ、臣子ノ恒道ヲ提誨シ給フ。臣等感激已ム無シ。

伏シテ見ミルニ、

陛下仁孝恭儉ノ天資ヲ以テ至隆ノ治ヲ圖リ給フ。
皇祖　皇宗暨　列聖ノ神祐
陛下ノ聖躬ニ在リ、皇業愈〻昌ニシテ德澤益〻浹ク、頌音四海ニ洋溢セム。臣等夙夜勤勉力ヲ戮セ心ヲ同クシ、忠藎ノ節ヲ勵マシ、報効ノ誠ヲ竭シ、以テ　聖旨ニ答ヘ奉ラムコトヲ誓フ。

臣等幸ニ盛儀ニ班列シ、瑞雲ノ鳳殿ヲ繞リ仁風ノ錦幢ヲ颭スヲ望ミテ、聳慶躍悅ノ至ニ任フル無シ。臣重信帝國臣民ニ代リ、恭シク大禮ヲ賀シ、千萬歲ノ壽ヲ上ツル。臣重信誠懽誠

喜頓首頓首、謹ミテ言ス。

大正四年十一月十日

内閣總理大臣正二位勲一等伯爵　臣　大隈重信

自讀文

一　文學藝術の三作用

坪内逍遙

凡そ人の、其の趣味性に適合せる文學もしくは藝術に接するや、少くとも其の當座、暫くは心陶然として醉へるが如きを覺ゆべし。これを刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、巧なる音樂を聽き、又は面白き演劇を觀、面白き小說を讀める瞬間の感じ即ちこれなり。

或はいまだ曾てかくの如き經驗なしといふ者もあらん。そは生來の趣味性の極めて鈍きか、然らずば其の鑑賞上の修養の不足なるがためなるべし。藝術品の高尙に過ぎたるために趣味を感ぜしめざる塲合、もしくは見馴れ聞馴れざるが爲に聯想起らず、隨つて深き味を解せず、それがため興を覺えざる例はあれども、如何なる藝術品に對しても、いまだ曾て何等の面白味を

感せずといふが如きは、人性の自然にあらず。又畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌、小說にもせよ、其の他の藝術品にもせよ、いまだ曾て如何なる種類の人間をも、恍惚たらしめしことなしといふが如きものあらば、そは名のみの藝術品ならん。苟も文學、藝術と稱するかぎりは、少くとも忘我作用だけは具へざるべからず。知識の上流に位する者のいやしみ斥くる類と雖も、社會のある階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論、それ以上の効力をも有する例おほし。

輸贏　かちまけ。

惘然　ぼうとすること。

(一)論語に、「子在レ齊聞レ韶。三月不レ知二肉味一。」感興の筏に乘る　興に乘じて。

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞する其の刹那、其の瞬間のみ心恍惚たるに止らず。譬へばかの碁將棊を好める者の輸贏に我を忘るゝが如く、其の當座幾十分時、時としては其の後二三時間、長き時は其の夜一夜、甚だしきは三四日、さながら夢みつゝあるが如く、惘然たるをいふ。「能の後三日。」とはかくの如き經驗をいへるなり。(一)「三月、肉の味を知らず。」といへる、はた此の種の心境を指せるにはあらずや。蓋し藝術の供する感興の筏に乘りて、われ知らず情の海に浮び出でて、心を別天地に遊ばしむるをいふなり。屑々營々たる現實界を離れて、一種理想的なる世界にさまよふをいふなり。かゝる心境に遊ばしむるを、文學、藝術の微妙なる作用となす。忘我作用に止れるは、其のなほ甚だ低級なるを證す。

屑々營々　せはしく働くありさま。

別乾坤　別天地。

しかしながら、藝術の眞作用は同化に至りて極る。作用の遊神に止れる間は、譬へばかの安住の地を悟得せざるものと一般、一たびは現實を離れたりと雖も、いつ再び現實に復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は夢裏の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は、心暫く自我を脫して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れども、そは其の夢の穩かなる間のみ。一たび穢き騷しき現實界の聲に喚起さるゝや、美しき夢裏の幻影は忽然として消え、なまなかに其の夢の美しかりしが爲に、更に愈〻現實の醜惡なるを覺ゆることなきにあらず。

思ふに世間大概の人の經驗せる所ならんが、幼時にありては、如何に奇怪なる夢と雖も、少くともこれを夢みつゝある間には、夢と心附くこと稀なるを例とす。然るに漸く成長し、自意識の發達するや、日夜に心を勞すること多

きがため、夢も亦圓なる能はず。隨つて其の夢みつゝある最中にだに、こは夢なりと心附くこと次第に多し。これ其の夢の破れやすき所以なり。それと同理によりて、人々の自意識の、著しく鋭敏になり來れる今日においては、彼の忘我遊神を最上の作用となし、一種の美しき夢に遊ばしむる事を以て能事了れりとなすが如き文學、藝術は、最早人心を魅するに足らず。隨つて假令刹那の忘我には用立つとも、長き遊神には用立たざるものの如し。現代の人は、藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心醉し、且同化せんことを欲す。かの偏に技巧に依り空想に賴る文學藝術の、今は昔時の如く歡迎せられざるは、主として此の理に本づくなり。

文學藝術の功用のなほ單に遊神に止れる間は、其の果して男子畢生の事業となすに足るべしや否や、頗る疑なき能はず。「人生は短し、藝術は壽し。」と古人はいひたり。然れどもこは果して古今東西、幾何の文學藝術にか適用せらるべき。英雄豪傑の偉業は、槿花一朝の榮にして、多くの星霜を經たる後には、空しく山丘と化し了れども、ひとり文學者、藝術家の大作品は、長へに日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今東西の名篇傑作にして、今尚眞に人心を皷吹し得る程のもの、果して多く世に存せりや否やげにや長く世に玩賞せられて、一時の忘我用、遊神用に供せらるゝ程度のものは、東西共に決して少からざらんも、單にさばかりの功用にては、果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を四十年、三十年に縮めて、刻苦經營すべきものなるか否か、甚だ疑はしといはざるべからず。宗教か、育英か、社會の改善か、政治か、實業かにたづさはりて、少くとも一國一代の爲に身を獻ぜん方、或は一層立派なる事業にはあらざるか。予はかくはいへど、文學、藝術は必ずしも毎に教化を目的とせざるべからずといふにはあらず。況や其の實用的ならんことをや。畢竟こゝには文學、藝術の目的を論ぜんと欲するにあらず。唯其の作用において忘我遊神以上に幾段を進めて、他を同化せしむる力を具へざる間は、いまだ眞の藝術的作用となすべからざるをいふのみ。

もしそれ同化作用を有する藝術に接せんか。人は其の刹那において自我を忘れ、其の當時幾何時か全く現實を超脱して、さながら別天地に遊行する

自意識　自分は自分といふ考。

(一)希臘の哲人ヒポクリトスの格言。

(二)白樂天の詩に「松樹千年終是朽。槿花一日自爲榮。」

(三)李白の江上吟に「屈平詞賦懸日月。王臺樹空山丘。」

感あるべし。しかのみならず、其の感の漸く薄らぎて、自我に復歸せる後と雖も、多少わが好尚、もしくは性癖の一變したるが如き思あるを例とすべし。譬へば催眠術によりて精神療法を行はれたる不良少年などの場合に似たる心的現象を生ず。即ち穢かりし心も自然に美しく、荒々しかりし心も自然に優しく、めいりたりし心も引立ち、快活になり、嚴肅になる。一言にて評すれば、當の藝術品の內容と、自家の心とが相融會して一となるなり。狹隘なる現實界以外、もしくは以上に、いつしか一の常住界、安住の別天地の成立てるを意識して、何となく心に餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く、體胖(ゆたか)なる狀態これなり。之を藝術の同化作用となす。かくの如くにして時を經る間に、自然の勢として、此の狀態を自家以外に推及さんと希ふ心を生ず。こゝに至りては逆に現實界を擧げて、藝術界にて藝術家の經驗すると、全然同趣味のものとなさずんば止まざらんとす。こゝに至りては藝術家の態度は頗る宗教家の態度に似たるものとなり、強ひて勸化(くわんげ)門を開きてなりとも、世を擧げて同一味に化せしめんと欲するに至る。

(一)大學に「富潤レ屋。德潤レ身。心廣體胖。」

勸化門　人にすゝめる方法。

然れども、所謂同化作用は或は高く、或は卑く、いづれの方向にも向ふ。善化の用をもなせば、惡化の用をもなす。藝術の力はよく風を移し、俗を易ふ。かの健全ならざる藝術の風俗を壞ることある理も、これを推して考ふれば、自ら明白なり。古の賢君明主は樂の正雅を貴び、淫哇(いんあい)を惡みき。音樂の人心を動かすことは最も廣く、かつ深ければならん。其の理は移して以てあらゆる藝術の上に適用するを得べし。

二　東路の旅(一)

東山(二)の邊なるすみかを出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒(三)ひきわたる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥(ゆふつけどり)かすかに音づれて、游子(四)なほ殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸(五)といひける世捨人、此の關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心を澄し、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐(六)の風の烈しきを佗びつつぞ過しける。

(一)仁治三年京都から鎌倉迄の行旅を寫した東關紀行の中。作者は源親行と傳ふ。

(二)京都東山。

(三)陰曆八月十五日(後には十六日)信濃から牧の馬を六十疋朝廷に奉るとて。古今集「逢坂の關の關貫之の清水に影見えて、今かひくらん望月の駒。」

木綿付鳥　鷄。

(四)支那戰國時代孟嘗君の故事「游子猶行ニ於殘月一。函谷鷄鳴。」

(五)平安朝の頃逢坂の關に住んだ盲人。琵琶の名手と傳へられてゐる。

(六)今昔物語に蟬丸の歌「逢坂の關の嵐のはげしきに、しひてぞゐたる世をすごすとて。」

いにしへの藁屋の床のあたりまで
心をとむるあふさかの關

心をとむる　注意をひく。

關山を過ぎぬれば打出濱、粟津原など聞けども、未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷りありて大津宮を造られけりと聞くにも、此のほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより
名のみ殘れる志賀のふるさと

(一)琵琶湖。
(二)萬葉集歌人の一。笠朝臣麻呂。養老頃の人。

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖(一)遙にあらはれて、かの滿誓沙彌(一)が比叡山にて此の海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、漕(三)行く舟のあとの白波、誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ
ながめし跡をまたぞながむる

(三)「世の中を何にたとへんあさぼらけ、こぎゆく舟のあとの白波。」（滿誓沙彌）

此の程をも行過ぎて、野路(の)といふ處に至りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。

篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。むかひの汀、綠深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山(一)の影を浸さねども、青くして混濁(くわうだく)たり。洲崎處々に入りちがひて、葦、かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦、鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人此の宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居も疎になりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥(二)の川の淵瀨には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより
荒れのみまさる野路の篠原

行暮れぬれば武佐(むさ)寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛(三)寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。行末遠き旅の空、思ひ續けられていとゝいたう物悲し。

ところせし　一ぱいに露がかゝつた。
(一)新撰朗詠集、白樂天の句に「昆明春。昆明春池岸古春流新。影浸南山青滉瀁。波沈西山紅渺瀰。」
滉瀁　深くしてひろいありさま。
葦手　ちらし書きの一種。
(二)古今集の歌に、「世の中は何かつねなる飛鳥川、昨日の淵は今日の瀨となる。」
(三)朗詠集白樂天の句に「遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。」

都出でていくかもあらぬ今宵だに
かたしきわびぬ床の秋風

音に聞きし醒井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水、あたり涼しきまで澄渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行が、

道のべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちとまりつれ

と詠めるも、かやうの處にや。

道のべの木陰の清水むすぶとて
しばしすゞまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にもおとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はたゞ秋の風。とよませたまへる歌おもひ出でら

(一)藤原良經。
(二)新古今集「人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後はたゞ秋の風。」

れて、此の上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉をのこさんもなかなかに覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數見ゆるばかりに澄みわたれり。二千里の外の故人の心思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日、株瀬川に宿して一宵、しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ〴〵遠情を前途一千里の雲に送る。」など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んとは

——東關紀行——

風情もめぐらしがたければすぐれた歌想も得られさうでない。

(一)拾遺集源順の歌「水のおもに照る月なみをかぞふれば、こよひぞ秋の最中なりける。」
(二)「三五夜中新月色。二千里外故人心。」（白樂天）

三　與謝蕪村

藤岡作太郎

蕪村與謝氏、本氏は谷口、名を長庚といひ、後に寅と改む。字は春星。蕪村、三菓堂、夜半亭、碧雲洞、紫狐庵等の號あり。攝津東成郡毛馬村の人。幼にして母の生

家に養はる。其の家は丹後與謝郡に在り。後與謝氏を名のれるはこれが爲なり。長じて江戸に赴き、俳諧を早野巴人(一)に學び、後京都に住みて畫と俳諧とを以て世に立てり。天明三年、六十八歳にして歿す。

蕪村の俳諧に於けるや、世既に定評あり。今日の俳句を評する者多くは此の翁を激賞して措かず。蓋し芭蕉以後其の道漸く腐敗し來れるを、更に清新なる格調を唱へて、其の頽勢を挽回せるいはゆる天明の改新は、蕪村を以て其の功勞者の首位に置くべきなり。句法は畫法と共に粗放奇拔、

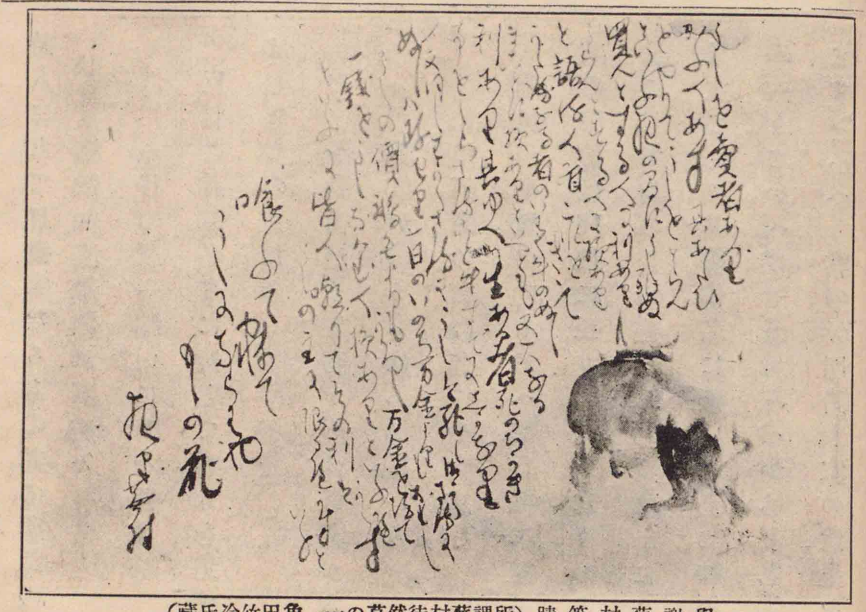
あらむづかしの假名遣やな。字義に害あらずんば、あゝまゝよ。

梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら

と喝破せるは、即ち其の畫に神韻を本とし、形似を末としたると同一筆法に非ずや。蕪村また好んで京畿の名所及び古代の人物風俗を詠ず。たとへば、

春月や印金堂(三)の木の間より
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月
はるさめや綱(四)が袂に小挑灯

(一)其角の門人。一度京都に出で、老後復江戸に歸つた。夜半亭と號す。
(二)德川十三代將軍家治の時。(一二四四三)
(三)山城國葛野郡宇多野にあり。し妙光寺境内の一堂。
さしぬき　昔の袴の一。裾を絲でさし通しふくらせてくゝつたもの。
(四)渡邊綱。源頼光の四天王の一人。夜、羅城門で鬼を退治したと傳へらる。
衆徒　僧侶。平安朝末、叡山其の他で暴威をふるつた。



與謝蕪村筆蹟（所謂蕪村徒然草の一、角田竹冷氏藏）

喰うて寢て牛になればや桃の花。夜半蕪村

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

かくの如きは山紫水明、又千年の歴史ある舊都の地に住みたればなるべし。されど其の畫はこれに異なり。古代繪卷物などの影響も、强ひて求むればまた認むるを得べからざるに非ずと雖も、蕪村の特色は却つて新に漢畫を興せるにありて、陳腐なる狩野、土佐は捨てゝ顧ず。されば其の俳諧に屢〻漢語を用ひしは正に其の畫法と相應す。

秋風や酒肆に詩歌ふ漁者樵者
霜百里舟中にわれ月を領す

詩人にして且畫家なるもの、其の所詠の畫趣あるは當然の事なり。

柳散り清水涸れ石處々
一行の雁や端山に月を印す

巨刹に遊び、名畫に接して古人を追懷し、詩興勃然、發して句を成せりとおぼしきものまた多し。

不動畫がく宅磨(一)が庭の牡丹かな
雪信(二)が蠅うちはらふ硯かな
相阿彌(三)の宵寢起すや大文字

蕪村が畫道の功も敢へて俳諧に讓らず。されど生時は畫名いたく著れず、其の聲價は歿後に至りて高くなりぬ。これ蕪村は大雅に比するに、尙數年の長にして、其の若く盛なりし頃は、未だ文人淡泊の畫を賞する者少かりしと、又主として其の俳名に蔽はれしとに因れるなるべし。其の畫或は彭百川(四)に學べりといへども、蕪村みづから稱して、「吾に師なし。古今の名書畫を以て師とす。」といへり。其の元明諸大家の遺墨を研究して、以て一家を成せる事推し

(一)宅磨榮賀は佛像人物畫の妙手。宅磨派の祖。鎌倉時代末期の人。

(二)清水雪信は探幽の姪で、女流畫家中古來第一と稱せられる人。

(三)畫家で造庭、詩歌、香茶等に通じ、足利義政に仕へた人。大文字毎年八月十六日夜、京都東山如意嶽で大の字の形に火を焚く行事。

(四)彭城(サカキ)眞淵のこと。百川は其の號。德川八代將軍頃の人。

て知るべし。

蕪村の畫がくところ減筆の粗畫多く、又好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫がく。運筆箇にして狂、恰も兒戲の如くにして、しかも興味津々たり。屢〻題するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は實に此の翁に至りて興りしなり。然れども、蕪村の作品はたゞ此の種の粗畫のみにあらず、緻密なる山水等の畫も亦往々にして存せり

——近世繪畫史——

四　俳句百吟

元日や家にゆづりの太刀佩かん　去來
年玉や利かぬ藥の醫三代　太祇
思ひ出て藥湯立つる餘寒かな　召波
春立ちてまだ九日の野山かな　芭蕉
彼岸前寒さも一夜二夜かな　路通
のどかさに無沙汰の神社廻りけり　太祇

醫三代、藥は利かぬが三代つゞいた古馴染の醫者がもの堅く年禮にやつてくる。

枯蘆やまだ陽炎の一二寸　芭蕉

鉢叩來ぬ夜となれば朧なり　去來

鉢叩　空也念佛の乞食僧瓢簞を叩き經文を誦し歩く。冬の夜のものなり。

四方より花吹入れて鴉の湖　芭蕉

大原や蝶の出て舞ふ朧月　丈草

(一)京都洛外。

無性さやかき起されし春の雨　芭蕉

物種草花の種子。

物種の袋ぬらしつ春の雨　蕪村

曙のむらさきの幕や春の風

東風吹くと語りもぞ行く主と從者　太祇

出代や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

出代　雇人の年期みちて交代すること。

やぶ入の寢るや一人の親の側　太祇

綿とりてねびまさりける雛の顔　其角

ねびまさる　おとなびる。

動くとも見えで畑打つ男かな　去來

日は日くれよ夜は夜明けよと鳴く蛙　蕪村

鳴く猫に赤ン目をして手鞠かな　一茶

一升はからき海より蜆かな　其角

紫に夜は明けかゝる春の海　几董

夕汐や柳がくれに魚分つ　白雄

奈良七重七堂伽藍八重櫻　芭蕉

人戀し灯ともし頃を櫻ちる　白雄

草臥れて宿かる頃や藤の花　芭蕉

山路來て何やらゆかし菫草

ぬれ緣や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪

春の泊鯛よぶ聲や濱のかた　几董

行く春を近江の人と惜しみける　芭蕉

行燈をとぼさす春を惜しみけり　几董

五月雨の雲吹落せ大井川　芭蕉

蛸壺やはかなき夢を夏の月

暑き日を海に入れたり最上川

目の果に帆一つ白し青嵐　五明
文もなく口上もなし粽(ちまき)五把　嵐雪
一夜二夜蚊帳めづらしき匂かな　春武
夕立や家をめぐりて家鴨なく　其角
野を横に馬牽き向けよほとゝぎす　芭蕉
うき我を淋しがらせよ閑子鳥　蕪村
鮎くれて寄らですぎゆく夜半の門　芭蕉
しづかさや岩にしみ入る蟬の聲
草の葉を落つるより飛ぶ螢かな
我が宿は蚊の小さきを馳走かな
さざれ蟹足はひ上る清水かな
雨折々思ふことなき早苗かな
あらたふと青葉若葉の日の光
まづたのむ椎の木もあり夏木立

絶え〳〵に温泉(ゆ)の古路や苔の花　蓼太
渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆
夕暮や野に聲のこる麥の秋　楚秋
秋立つや雲は流れて風見ゆる　樗良
秋來ぬと合點させたる嘘かな　蕪村
がつくりとぬけ初むる齒や秋の風　杉風
あか〳〵と日はつれなくも秋の風　芭蕉
新月に蕎麥うつ草の庵かな　几董
欠(あくび)して月ほめてゐる隣かな
名月や門にさし來る潮がしら　芭蕉
名月や疊の上に松のかげ　其角
名月や烟這ひゆく水のうへ　嵐雪
名月や夜は人すまぬ峰の茶屋　蕪村
三井寺の門たゝかばやけふの月　芭蕉

鯛は花は見ぬ里もありけふの月　西鶴
荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉
更けゆくや水田の上の天の川　惟然
星月夜空の廣さよ大きさよ　尚白
霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き　芭蕉
霧の香や松明すつる山かつら　白雄
初潮に追はれてのぼる小魚かな　蕪村
枕上秋の夜を守る刀かな　蕪村
四五人に月落ちかゝる躍かな
荒れ〳〵て末は海行く野分かな　猿雖
ゐのしゝも共に吹かるゝ野分かな　芭蕉
薪ともならで朽ちぬる案山子かな　正秀
雁金の竿になる時なほ淋し　去來
牛叱る聲に鳴立つ夕かな　支考

はぜ釣るや水村山郭酒旗風　嵐雪
白菊の目に立てゝ見る塵もなし　芭蕉
ひよろ〳〵となほ露けしや女郎花
波の間や小貝に交る萩の塵
送られつ送りつ果は木曾の秋
枯枝に鴉のとまりけり秋の暮
小坊主の門に立ちけり秋のくれ　闌更
塵塚に朝顔咲きぬ暮の秋　太祇
初時雨猿も小蓑をほしげなり　芭蕉
禪寺の松の落葉や神無月　其角
此の木戸や錠のさゝれて冬の月
寒月や我ひとり行く橋の音　太祇
凩のはてはありけり海の音　言水
下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

君火たけよきもの見せん雪丸げ　芭蕉

馬ほく〳〵我を繪に見る枯野かな　蕪村

息杖に石の火を見る枯野かな　同

水鳥や向の岸へつういつい　惟然

からびたる三井の仁王や冬木立　其角

我が寢たを首上げて見る寒さかな　來山

埋火や壁には客の影法師　芭蕉

住みつかぬ旅の心や置炬燵　同

炭團法師火桶の穴より窺ひけり　蕪村

ふる里や臍の緒に泣く年の暮　芭蕉

改訂

帝國讀本卷十

終

通用字及び正字對照表

（玆に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
丙	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢	獵	獵
仭	仞	劍	劍	塚	冢	戲	戲	欵	款	玄	玄
佞	佞	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲	瑣	瑣
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺	畫	畫
兎	兔	卑	卑	寇	寇	抜	拔	毒	毒	留	畱
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	氷	冰	畧	略
冒	冒	厨	廚	尅	剋	捏	捏	涅	涅	痴	癡
決	決	厩	廐	帽	帽	携・攜		潤	閏	皷	鼓
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛	潛	盃	杯
准	準	収	收	廩	廩	既	既	焔	焰	蓋	蓋
凉	涼	叙	敘	廻	廻	昂	昂	熔	鎔	盜	盜
減	減	唇	脣	徃	往	晋	晉	猿	猨	砲	礮
凡	凡	器	器	恒	恆	央	央	猪	豬	碍	礙
函	函	噴	噴	慾	慾	朽	朽	猫	貓	稟	稟
刄	刃	皿	皿	懺	懺	桿	杆	献	獻	頴	穎

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
顋	頤	纏	纏	臥	臥	裡	裏	賓	賓	間	閒
秘	祕	罰	罰	致	致	褒	褒	賛	贊	陷	陷
窃	竊	群	羣	皐	皐	覇	霸	贋	贋	隔	隔
竪	豎	羮	羹	舗	鋪	覧	覽	軟	輭	隙	隙
簒	纂	耻	恥	舘	館	解	解	輙	輒	隷	隸
籤	籤	聟	壻	艶	艷	記	記	隣	鄰	駄	駄
粘	黏	胆	膽	莽	莽	讖	讖	釜	釜	麺	麪
穀	穀	脉	脈	萌	萌	雛	雛	針	鍼	鬪	鬪
紀	紀	腸	腸	蛩	蛩	象	象	鐵	鐵	鬱	鬱
纖	纖	膝	膝	衛	衛	豹	豹	鎖	鎖	鶴	鶴

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
万	萬	冊	冊	叶	協	姉	姉	嶋	島	忘	忘
並	竝	冨	富	囓	齧	娉	聘	庵	菴	慍	慍
凶	凶	冲	沖	坂	阪	婚	婚	弊	獘	慙	慚
京	京	勅	敕	野	埜	岳	嶽	弊	獘	考	攷
侯	侯	厠	廁	妊	姙	峨	峨	強	强	普	普
傚	傚	厮	廝	妍	妍	峯	峰	徵	徵	村	邨

同字表（いづれにてもよし）

柿 柹 毘 毗 砧 碪 網 綱 荒 荒 蹋 蹧
案 桉 汙 汚 稿 藁 總 總 蔭 蔭 遁 遯
碁 棊 棋 温 溫 競 競 綵 裸 虱 蝨 鉾 矛
棕 椶 烟 煙 筍 笋 組 組 衽 袵 銹 鏽
楫 楫 無 无 笄 笄 羈 羈 訛 譌 陰 陰
槁 藁 狢 貉 粽 糉 舩 船 譁 嘩 雁 鴈
概 槩 狸 貍 糾 糾 艪 櫓 谿 溪 雞 鷄
朴 樸 睹 覩 紆 紆 花 華 踪 蹤 駈 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中*標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

*亙（クワン）亘（コウ）
ワタル。「連亙」
桓ニ同ジ。

*体（タイ）體（ホン）
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
カラダ。

*但（タン）但（シヨウ）
タヾシ、タヾ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

*僭（セン）僭（デツ）
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

胄（チウ）胄（ナウ）
カブト、兜。「甲胄」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「胄裔」

*協（ケフ）協（ケフ）
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

*刺（シヘキ）刺（ラツ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞剌比亞」

*台（タイ、ダイ）臺（コウ、ゴ）
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。

*后（コウ、ゴ）後（コウ、ゴ）
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

*商（シヤウ）商（デキ）
アキナヒ。
モト、本。

壺（コン）壺（コ）
ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

姫（キ）*姫（シン）
ツ、シム。
ヒメ。

托（タク）*托（タク）
拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

託（タク）*託（タク）
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

担（タン、ケツ）*擔（タン）
ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

改（カイ）*攺（イ）
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

槍（サウ）*鎗（サウ）
ヤリ。
鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

欠（ケン）缺（ケツ）
アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

糸（ベキ）絲（シ）*
ホソイト、細絲。
イト。

*羨（セン）羨（イ）
支那ノ地名。
ウラヤム。

虫（チユウ）*蟲（チユウ）
魚介類の總稱。又ヽムシ。
シム。

詫（タイ）*詫（タイ）
ワビ、ワブ。「詫狀」
詭ニ同ジ。アザムク。

詔（デン）*詔（タウ）
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

證（ショウ）*證（セイ）
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

豐（ホウ）豐（レイ）
禮ノ古字。
ユタカ。

迄（キツ）*迄（セフ）
マデ。
ユク、行。

選（セン）*選（セン）
エラブ。（ヨリトル）
エラブ。（書物ヲ編纂ス）

*郤（ダキ）　ヒマ、隙。
*卻（キヤク）　ノリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタヘル。「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、鍔。

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、道
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十一月五日印刷
大正六年十一月八日發行
大正七年二月二日訂正再版印刷
大正七年二月五日訂正再版發行
大正七年十一月十一日改訂印刷
大正七年十一月十四日改訂發行
大正七年十二月十日改訂三版印刷
大正七年十二月十三日改訂三版發行

改訂帝國讀本

定價
卷一、二各金參拾八錢
卷三、四各金參拾六錢
自卷五至卷十各金參拾錢

著者　芳賀矢一
東京市神田區裏神保町九番地

發行兼印刷者　合資會社　冨山房
合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印刷所　合資會社　電新堂

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替口座東京〇五一一番

著作權所有